

神秘のグレート・ベンド

ナムチャ・バルワ

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

(H A J)





ナムチャ・バルワ北面頂上岩壁

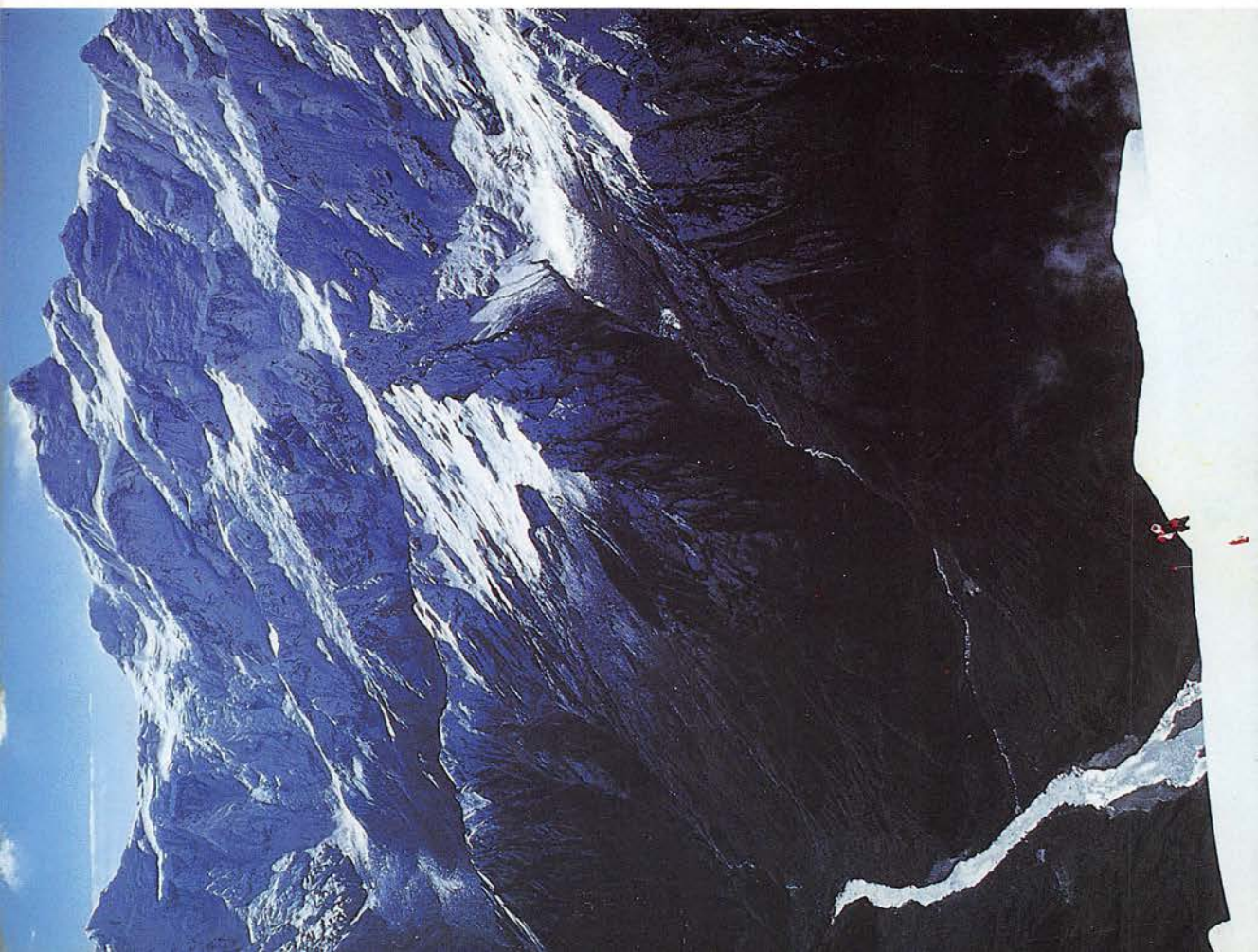


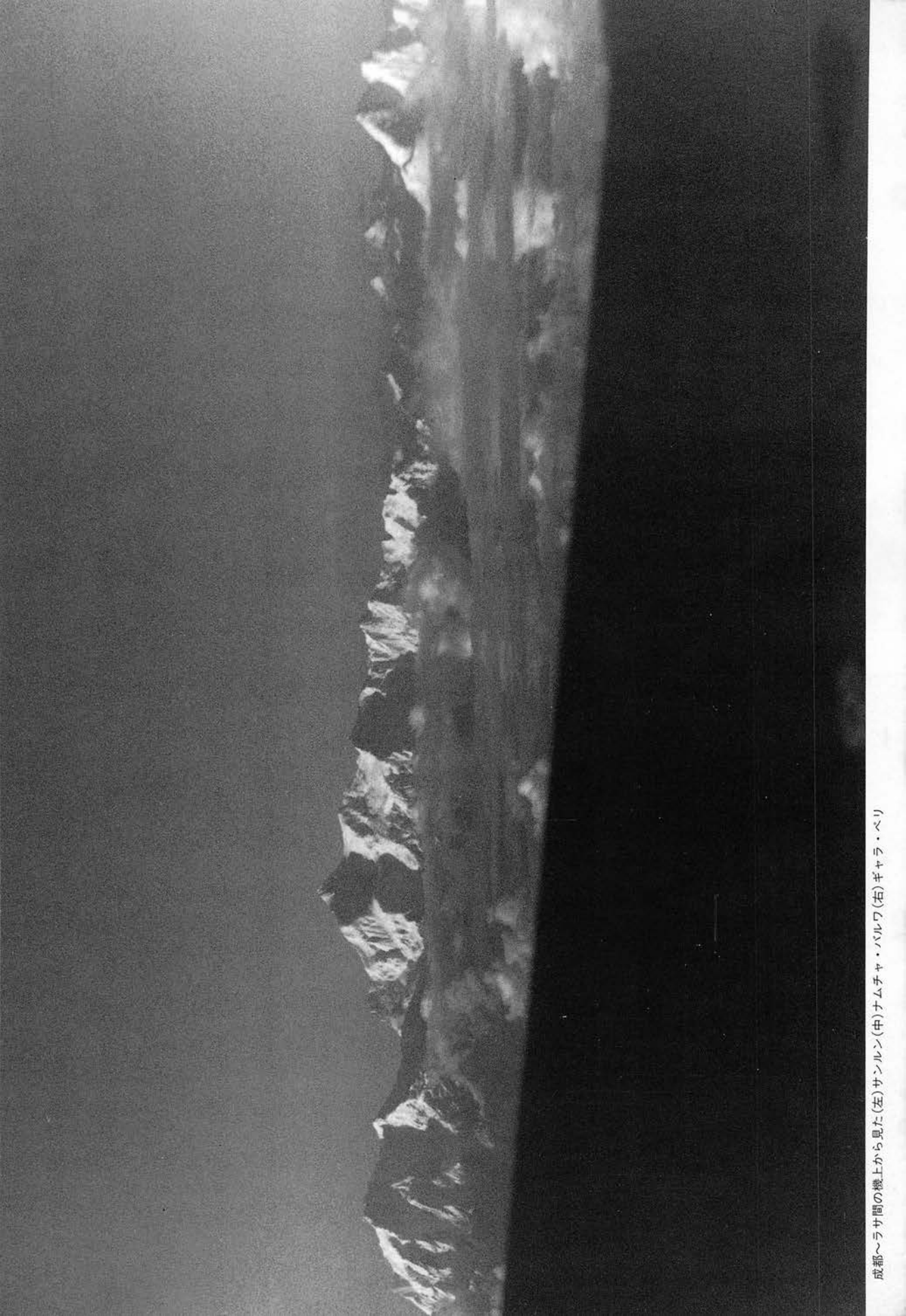
(左)サンルン (右)ナムチャ・バルワ北面と西北西稜



◀ギョラ・ペリからヤル・ツアンボ一下流とナムチャ・バルワを見る

▼ギョラ・ペリの登攀

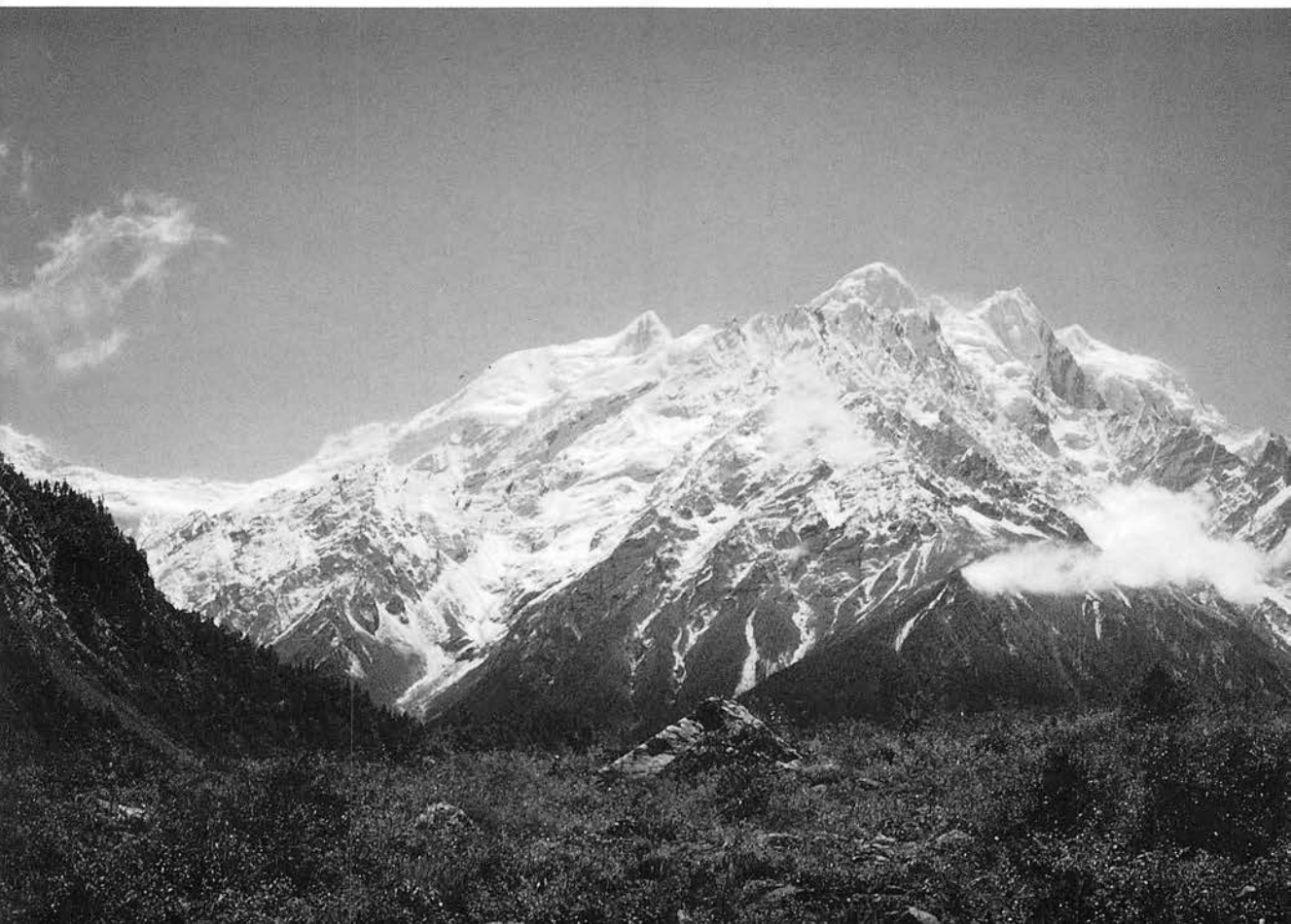




成都へラサ間の機上から見た(左)サンルン(中)ナムチャ・バルワ(右)ギヤラ・ベリ



◆ナムチャ・バルワ北面





ナムチャ・バルワ西北西稜上のピーク群



ナイブン峰





キイカル村とナムチャ・ハルツ西北西稜

機上から見たサンルン、ナムチャ・バルワとギャラ・ペリ（実線・破線はヤル・ツァンポーの流れ。右が上流）

ナムチャ・バルワ

ギャラ・ペリ

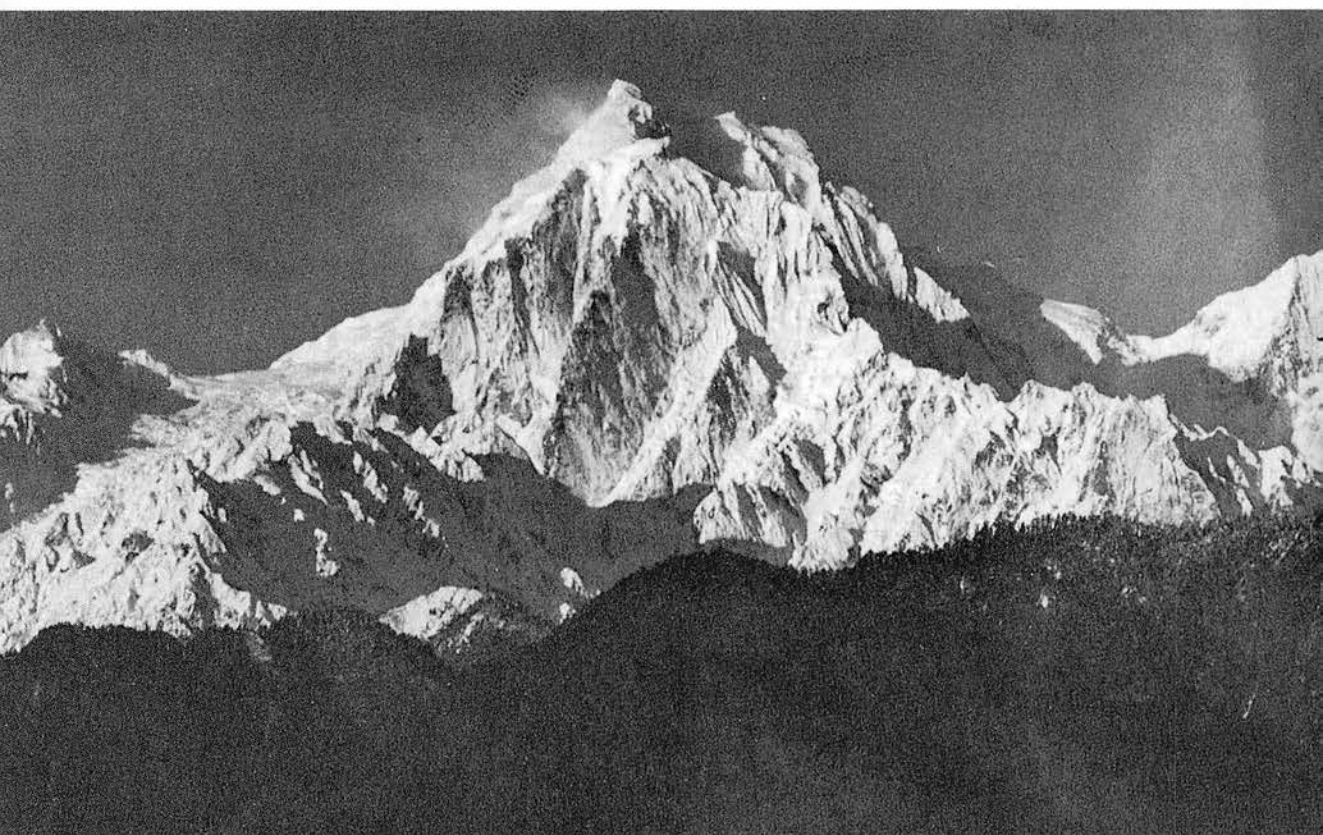
センダン・プー

サンルン





ギャラ・ベリ西面



ギャラ・ベリ東面 (World Atlas of Mountaineering より)



神秘のグレート・ベンド

ナムチャ・バルワ



目 次

第I章

ナムチャ・バルワ

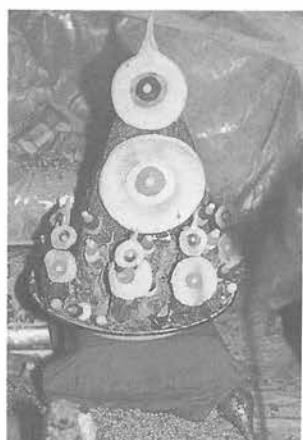
- (I) ナムチャ・バルワへの道……………稲 田 定 重………… 1
- (II) 憧憬のナムチャ・バルワ……………山 森 欣 一………… 8
- 参考 ナムチャ・バルワ峰を科学調査……………北京週報No.49より…………15
- ” ナムチャ・バルワ高度の変遷……………16
- ” A Quest of Flowers に収録されているグレート・ベンドの写真 ……16

第II章

ギャラ・ペリ&ヤル・ツァンポー

- (I) ギャラ・ペリ偵察 1985年……………山 森 欣 一…………19
- (II) ギャラ・ペリ初登頂 1986年……………尾 形 好 雄…………23
- (III) ギャラ・ペリの気象……………尾 形 好 雄…………32
- 参考 ギャラ・ペリ登山隊員名簿……………33
- (IV) ヤル・ツァンポー西、東……………山 森 欣 一…………34
- 参 考 文 献……………41
- 編 集 後 記……………42

ナムチャ・バルワ



(I) ナムチャ・バルワへの道

稲田 定重

1. 実践への序曲

H A J が創立されたのが1967年、当初からインドへの傾倒が深く、インド・ヒマラヤに関しては、研究・アプローチ・実践とも他に勝るものを持ってきた。

そして、H A J において、新しい形の登山をめざそうとする動きがヒマラヤに関しては後進地といわれてきた東北地方を拠点として起こってきた。稲田の手元から「小遠征研究グループ」結成の趣意書が各地の有志にまわされたのは72年11月であった。

同グループは、73年2月に「Expedition 研究グループ」と改名し、具体的計画を持って濃密な活動を展開して行く。「ヒマラヤ地域総合遠征計画＝Himalayan General Project」が盛んに議論され、そのスタートとしてラムジュン・ヒマール遠征がスタートする。

73年、東部ヒマラヤ研究会が藤井毅を中心として生まれ、10余名のメンバーが、ヒマラヤの東部地域に関する山と人と文化に興味を持って集まってきた。東部ヒマラヤとは、シッキム以東、ブータン、旧アッサム、ビルマ、雲南につながる地域を意識し、チベット東南部もその範囲に入れていた。この研究会が発足するのと前後して、堀内立三を中心にしてチベット研究会の活動が始動してきた。チベットの山を語る前に、まず、如何にして入域するかが問題であった。

この時期にH A J では、ブータン、ワハン、ラダックの地域研究会と地図研究会が相次いで旗揚げした。

これらの動きは、それぞれ別個なグループや人間たちによってはじめられたというよりも、あり余る未知・未踏へのロマンを持った人間たちが相互に同志を求め、連携して全方位的なフィールドに布陣したといえるものであった。H A J のフィールドは、インド、ネパールを脱して全ヒマラヤに拡がりを見せ始めたのである。

中でも、ヒマラヤ東部地域への傾倒は、ブータン、アッサム、アルナチャルへの初入域を実現させ、北の彼方のチベット、ナムチャ・バルワへの想いを次第に現実のものとしてとらえて行くことになる。

74年1月、アッサム奥地への入域を果たした沖允人らは、平原の向こうにそびえる巨大なナムチャ・バルワを見た。グレート・ベンドを流れ下ってきたブラマプトラの水に触れて、その遙かなみなかみの高峰に想いをはせたのであった。

東部ヒマラヤ研が発行した「東部ヒマラヤ・ニュース」第2、3号(75年9月)は、ヤル・ツァンポー江大屈曲部を特集した。

Exp 研の度重なる会合の中でもナムチャ・バルワは共通した憧憬の山として熱っぽく語られてきた。

5,000mから始まって、6,000、7,000と階段を上るように進めてきたH A J の登山遠征は、81年の山森を隊長とするカンチェンジュンガにおいて一つの時期を画した。

縦走こそ逸したもの、最初の超高峰への挑戦において大量のサミッターをその頂に送りこみ次の時代の基礎を築いたのであった。

H A J の登山遠征は、この時期、進むべき方針を既に鮮明にしていた。即ち①技術的な困難と高度の追求、②未知・未踏の山と地域の追求、③高所登山の一般化であった。

これらのテーマの中で最もウエイトがかけられたのは、未知、未踏への挑戦であった。それは、創立以来の伝統であり、そのようなロマンを求める多くの人間が結集していたと言える。

未踏の高峰は、残り少なくなったとはいえ、まだまだ魅力的な目標が存在し、少ないだけにまた一層の輝きを放って我々を魅了していた。その頂点にナムチャ・バルワがそびえ立っていることをいつも意識しながら、地道なそして困難な渉外の果てに次々と夢を手中にして行く年月が続いた。

2. 中国との出会い

1980年、中国の山が開放され、登山界には中国ブームがまき起こされた。しかし、HAJは、開放に対応し得るだけの基礎研究を進めてはいたものの直ちに隊を送ることはしなかった。

何よりも宿願のカンチェンジュンガがあったし、その後、冬のエベレスト、ブータンの山、東カラコルムへのアプローチ等々、まだまだ継続中の魅力のテーマが残されていたからであるし、何よりも“未踏”へのロマンを大事にしていた。開放された中国の高峰群にはそれが稀薄であった。

HAJが中国登山協会（以下CMAという）代表とはじめて接したのは、82年10月12日、カトマンズでのUIAA総会の時であった。喬加欽主席を団長に呉明氏ら3名の代表団が参加していた。稲田は12日の夕食後と13日の朝食会の折に中国代表団と接触し中国の未踏の山への熱い想いを述べ、近い将来に訪中したい旨希望し快諾を得た。

UIAAから帰国すると直ぐHAJの中国への戦略が検討された。隊を送ることも大事だが中国登山に關しての研究活動を充実させ、HAJだけでなく広く登山界に貢献する中で息永く活動を進めることが確認された。そして、これまでHAJが他の国々に対してとってきたと同じように「中国登山研究会」を開催することとし、83年1月20日付で講師としてCMA代表の訪日要請書を送った。

83年3月7日、稲田、山森の第1次訪中代表団がはじめて北京空港に降り立った。許兢副主席の出迎えを受けた2人は、前門飯店の会議室で1週間近く、延40時間にわたって、主席をはじめ、CMA幹部と広汎なテーマでもって協議を重ねた。席上、ナムチャ・バルワに対しては、HAJとして将来登るべき山として熱烈な希望を述べた。

未踏主義を唱える本会ではあったが、ナムチャ・バルワに關しては中国側のこれまでの実践、世界最高の未踏峰という特別の事情を理解していた。まず中国側が登るか、あるいは合同（協力）という形での登り方が好ましいと考えていたのである。本会としては、中国側が成功するためにできるだけの技術的、物質的支援を惜しまないこと

を表明した。4月には、ルートに關する考察を伝え、上部岩壁帯の突破を想定したタクティクスと装備、人材協力を提案した。技術協力員は、豊富な高所経験と登攀能力に優れた2名を想定していた。

1月以来協議を進めてきたCMA代表の招請は7月に実現した。しかし、この招請には、日本国内の中国関係団体のさまざまな思惑と駆引きが介入し、結局数団体の共同招請の形をとらざるを得なかった。研究会の講師というような当初の趣旨は変容してしまった。

いわゆる友好団体の特殊な内幕を知ったことは、それなりに渉外を進める上で勉強になったし、中国登山の中で後発とはいえ、HAJの位置を内外に認識させることにもなった。

7月31日、東京で開催したHAJの「中国登山研究会」では、ナムチャ・バルワの28枚のスライドが公表された。これは、83年春のナイプンルートによる中国隊の試登によって得られたものであり、国外では初めて紹介される貴重なものであった。

ナムチャ・バルワ登攀のための技術協力は83年秋に四川省で行われた。16名の中国側隊員は、10月～11月まで約1カ月間、故角田不二、吉田憲司の両コーチの指導によりみっちりと岩登り訓練を行ったのである。

また、翌年の登攀に備えて最新の装備が中国側に船積みされていった。

3. 大屈曲部へ

大屈曲部には、ナムチャ・バルワと相対峙してギャラ・ペリ（7,294m）の巨峰がそびえ、二つの峰を鋭角に断ち割ってヤル・ツァンポーは世界最深の峡谷となして流下している。この大屈曲部への興味とギャラ・ペリの魅力は、ナムチャ・バルワの存在を一層際立たせていた。

ナムチャ・バルワに次ぐ夢として、また、最高の夢への道程としてギャラ・ペリをやることは必然のものと考えていた。

83年秋に具体的な協議を行い、その結果、85年の山森らの偵察隊がはじめて大屈曲部に突入した。

かくして、84年3月、CMAと接触して1年となり、ナムチャ・バルワに対し申請書を出す旨を話し、84年4月17日、正式に登山許可申請書を送ったのである。

申請では、本会創立20周年、中日国交正常化15周年、CMA創立30年にあたる1987年を実施年度としていた。計画は三つのパートで構成し、ナムナニ峰登山、ヤル・ツァンポー江源流から下降し大屈曲部の通過、そしてナムチャ・バルワ登山という壮大なものであった。120日間20日名のメンバーを予定し、偵察を85年とした。

この申請に沿って渉外は続行され、84～85年の兩年だけで8次にわたる代表団を北京に派遣してきた。

84年10月には、合同登山について協議をし、85年1月には、ナムチャ・バルワ登山に関して中国との合同登山という形に申請を修正した。

83年から85年にかけて、本会が中国に派遣した登山隊、トレッキング隊は11隊にのぼり特に85年単年度は6隊を派遣した。

本会のこの精力的な活動は、単独会として類例を見ないスケールがあり、かつ、未踏峰、未踏地区を主体とした点で、明らかに中国登山史に一時期を画したといえよう。

85年6月～7月、第9次訪中の稲田、山森はC

MAとの打ち合わせの上に立ってはじめてラサに西藏登山協会を訪ねた。

自治区である西藏登山協会は、CMAから一定の権限を享有し、他地域とは明らかに異なる主体性を有していた。ナムチャ・バルワはいうに及ばず、未踏峰の宝庫ともいえるチベットにおける登山活動をスムーズに進めるにはどうしても西藏登山協会との直接の関係を併せて確立しておく必要があったのである。

ラサの薄い空気の中で着いた翌日から精力的に各種の協議を進めた。

ローザン・ダワ副主席をはじめ、自治区政府首脳や幹部、旅遊局幹部と率直な話し合いを持つことができた。ナムチャ・バルワに関して自治区側の主体的考えは、我々の予想以上のものがあった。ヤル・ツァンポー大屈曲部をはじめ、チベット各地の高峰について大幅に新たな知見を加えることができたのも大きな収穫であった。

渉外は、中国政府トップに対しても多くの方々の協力を得て精力的に展開し、広汎な方々に我々の希望を申しあげてきた。

これらの動きに対し、CMAはHAJの提案の趣旨は理解できるとしながらも1988年以前にその按配をすることは難しいとの態度であった。

88年は、三国チョモランマ登山の年であり、C

ナムチャ・バルワ&ギャラ・ペリ、ヤル・ツァンポーの位置と周辺図



MAはこれに多くの精力を割いており、我々としてもうなずけることであった。88年という年限を切ってきたことはむしろ一定の前進と受けとめた次第であった。

4. チベットとの議定書締結

86年に入り、情勢は大きく動いてきた。

2月27日、四川省登山協会代表団が来日し、西南中国における本会の活動についての協議と研究会を開催し、中国登山の理解に大きな貢献をした。代表団が帰国するとすぐの3月6日、稲田、尾形は成都を経てラサを訪れた。代表団は、チベットにおける登山、特にナムチャ・バルワに関する協議を精力的に行った。その結果、近い将来にチベットとHAJの合同という形で他隊にさきがけて隊を派遣することに合意した。ただし、実施年について具体的に決定するまでには至らなかった。本会は、87年本隊を提示し、無理ならば87年の偵察、88もしくは89年本隊を希望した。

なお、この時の協議でラブチェ・カン(7,367m)の合同登山に関して確定できたことは大きな幸せであった。

この結果、86年から87年にかけてHAJは、ギャラ・ペリ、チョー・アウイ、カルジャン、ラブチェ・カン4座の7,000m峰に挑み、そのすべての頂に立つことができたのであった。

ヒマラヤの先達がかつて経験した初登頂時代を思わせるすばらしい期間を作り得たことはHAJの歴史に特筆されることであった。もう二度とこのような形のパイオニアワークは無いであろう。渉外にあたった者としては、正に冥利に尽きるものであった。これら一連の登山を通じてチベットとの信頼関係は大きく前進し、ナムチャ・バルワへのアプローチに巨歩を進めたのであった。

86年4月、遠藤副会長と山森は四川省登山協会との雪宝頂合同登山の具体的協議を目的として北京、成都を訪れた。4月28日、史占春主席は副会長との話し合いの中で、「ナムチャ・バルワのことは、ローザン・ダワ副主席にHAJとチベットとの合同隊ということで了承した、これをHAJはチベットに確認してほしい」旨述べた。

このあと代表団はラサに入り、ローザン・ダワ

副主席と協議した。席上、副主席から「来年、チベット隊が偵察に入るのでHAJも一緒になって偵察しよう」との提案がありこれを快諾した。

86年8月、史占春主席を団長とするCMA代表団が来日した。

8月14日、桜内義雄氏主催の歓迎昼食会の場に山森が同席した。席上、主席から「ナムチャ・バルワは、HAJとチベットが一緒になって実施することを許可した」旨表明があった。10数次にわたる渉外の末に到達しただけに感無量のものがあった。82年から足かけ5年の歳月が流れていた。

これを受けて登山計画は更に具体的に詰められた。ルートやタクティクスについては後に記すので省くが、夢の山は、今や現実のものとして大きくそびえていた。

しかし、86年10月末、我々は目を疑うような記事を日本山岳会会報第497号の中に見た。即ち会務報告として「ナムチャバルワ登山の件、中国に以前より申請していたところ、最近日本ヒマラヤ協会と中国登山協会が合同で登山するとの発表があったので、中国側に抗議の申入れをするとともに、政治ルートを通じて善処されるよう依頼する、承認」というものであった。

驚くべきことであった。そもそも「抗議」できることなのか、「政治ルートを通じて善処」とは一体何をする事なのか、この記事の中から我々は日本登山界にかねてから巢食ってきた山登りの世界にあらざるものの凝縮を見たのであった。

これに対し本会は直ちに次のような文書を送付し関係者に詳細を伝え、ただすべきものはただすという態度をつらぬいたのであった。(要旨のみ)

- ① 諸外国及び他会に先んじて申請したとは考えていないが、中国の山、それも未解禁峰への許可は必ずしも申請順位によるものではない。
 - ② 本会のこれまでの研究・実践・渉外の経過。
 - ③ ナムチャ・バルワは中国の主体性にもとづいて登られるべき山であり、HAJはこれに協力し中国側の成功をめざして共に全力を尽そうとしていること。
 - ④ 登山実施にあたっては国内のすぐれた登山者を広く結集し、ベストのチームであたること。
- 日本山岳会から提起されたこの問題の処理は

仲々面倒なものであったが常識の中で解決されたと認識している。

86年11月下旬、稲田、新貝勲(理事)、山森は北京でナムチャ・バルワを主テーマとして濃密な話し合いをCMAと持った。

11月22日、史占春主席、ローザン・ダワ副主席が列席しての会議の中で、中国側はこれまでの合同という線を変化させ、外国隊単独で登ることを希望する旨表明した。また、許可の出し方について率直な話し合いを持つことができた。

11月28日 ローザン・ダワ副主席を団長とする4名のチベット登山協会代表団がH A Jの招請で来日した。主目的は、87年秋のH A Jとチベットとのラブチュ・カン合同登山の議定調印であった。中国登山研究会も持たれた。

12月5日 ナムチャ・バルワ峰登山議定書が両者代表の手で調印された。(要旨以下のとおり)「中日両国登山技術の交流と両国人民の友好と相互理解の増進を一層推進するためチベット登山協会代表団は、日本ヒマラヤ協会の要請により11月28日から12月5日東京を友好訪問した。この間双方は日本ヒマラヤ協会ナムチャ・バルワ峰登攀の問題を友好のうちに協議し、下記の事項について合意した。

チベット登山協会は、日本ヒマラヤ協会が1988年ナムチャ・バルワ峰を登攀することに合意した。また、1987年3月から11月にいたる期間、ナムチャ・バルワ峰の二度の偵察について合意した」

遠い道のりであったが、努力はついに報いられた。ヒマラヤをめざして以来、忘れることはなかったナムチャ・バルワへの夢は、とうとう正夢になったのであった。

師走20日、渉外を共に進めてきた新貝(故人)は次のような墨痕あざやかな喜びの手紙を寄せてきた。

「……詳細は山森氏より聞きました。88年大部隊の陰にかくれてナムチャは誠にイブシ銀の価値あるもの、御成功を祈ります。……」

登山料は安いものではなかったが、一部、現物を含めて3回に分割し、ドル払いと規定していた。

5. 中国の複雑な事情の影

明けて87年2月、CMAから手紙が届いた。H A Jがチベットととり交した内容については同意しかねるという要旨のものであった。

中国国内の我々にはうかがい知れない事情のしからしむところと推察した。

7月に入り、稲田、山森が訪中し、史占春主席と会議した。CMAとしては秋までに正式に結論を出すとのことであった。

9月、ラブチュ・カン登山のためラサ入りした山森はローザン・ダワ氏から「何故H A Jはナムチャ・バルワの偵察に来ないのか?」とキツ問されCMAの同意が得られないことを説明した。

10月、チベット登山協会代表団が長野県山協の招きで来日した。H A Jは、東京で歓迎会を持ち懇談した。チベットとしては、議定書の内容にいささかの変更もないとのことであった。

H A Jとしては、ひたすら中国国内の問題が整理されるべきであるとの態度で事態の推移を見守っていたのである。

実際、88年は、3国チョモランマがあり、CMAは全力をあげて取り組んでいるところであり、ナムチャ・バルワは、まず3国チョモランマが鳴りをしずめてからでないと本格的始動は無理と判断せざるを得なかった。

チベット側には、88年計画を延期する旨連絡した。

88年1月、稲田、新貝、山森は北京を訪れて、史占春主席と長時間にわたり極めて率直に問題点を検討した。

お互いに言うべきことは言い、多くの点で互いの理解を深めることができた。

結局のところ、双方には幾つかの点でミスがあり、それらは、コミュニケーションの不足から来た理解不足に起因することを確認できた。そして、中国国内の複雑な事情の一端にふれ、この解決と整理が極めて重要であることを再認識した次第であった。

88年、H A Jは、中国において新青峰(6,860m)、ゲニ(6,204m)、シシャパンマ(8,012m)、チョー・オユー(8,201m)に隊を派遣し、夫々に見るべき成果を収めた。

89年には、チョモランマ、シャラリ(6,032m)

に遠征した。

そして、1990年8月には、未だ、未踏の輝きを保持していた久恋の山クラウン(7,295m)に二度目のチャレンジャーたちが出発していった。

中国の山への試みは絶えることなく続いているのである。

6. 新たなナムチャ・バルワ

ヒマラヤをめざす岳人の多くは、ナムチャ・バルワへの憧れを持っているにちがいない。

7,000mの未踏峰が指折り数える程に減少してきた現在、それは、我々の心の中で益々高度を高めつつある。

89年になって、またぞろナムチャ・バルワをめぐる、これまでに何回も繰り返されてきた日本特有の大時代的動きが現われてきた。

登山に、経済、政治などがからむとき、その登山の姿が恐ろしく変形された事例を我々は幾度も目にしてきた。いずれも8,000mの高峰でくり返されてきたものであるが、それが今度はナムチャ・バルワという7,000m峰で起こる恐れが出てきた。国際政治情勢の中でナムチャ・バルワは、一種のカードにもなり得るのである。「登山は政治である」と認識する彼の国の性格が一層それを容易にする。

しかし、わが国の登山者サイドがそのような仕掛けを画策し、自らの願望と社会的アピールを狙うのはもう終わりにしようではないか。

諸外国も含め、申請書が山積みされているというナムチャ・バルワだからこそ世界の目はこれまでになく厳しいものがある。

HAJがこれまで展開してきた渉外の過程は、一片の申請書を送りつけてきたというようなものではなかった。歴史も伝統もない組織が、ひたすら未踏への想い耐え難く、持てる力をあげて相手方に誠意をぶつけ、実践をつみ重ねながら信頼関係を築いてきたプロセスであった。

その頂点がチベットとの議定書調印であった。議定書は、中国側の諸事情をはじめとする幾つかの要素がからんで未だ実行されないでいるが、事実はここに記したように厳然として存在している。

未踏路線は、HAJが創立以来掲げてきたものである。けれど、渉外の過程で幾度も中国側に伝えてきたように、ナムチャ・バルワに最初に登るべきは中国登山界である。HAJは、その成功のために支援を惜しまないし、そのために指導員の派遣等も行ってきたのである。

20世紀も終わろうとする今日まで、未踏の輝きを保持してきた7,000m峰の多くはいわゆる“政治的”未踏峰であった。山そのものの困難さの故に生き永らえてきたものではない。

しかし、85年、ギャラ・ペリの偵察に入った山森が書いているように、ナムチャ・バルワはたとえ開放されていたとしても未踏を今に誇っていたかも知れないという。それだけの純登山的価値がこの山にはあるということだ。

HAJは、90年度総会において明確にナムチャ・バルワ登山の実施を決定し、新たな道を歩み出した。それは、未踏であるか無いかを問うことをやめ、HAJという組織の存在の証明としての行為であることを明らかにしておきたい。

一方、これはまた、会員各自が、己れの登山の成長の過程で、それぞれの生き方をかけて関わってきた道の果てに当然のように到達すべき山であるとも考えたい。

また、ナムチャ・バルワを夢に描き、共に同じ道を歩んできながら山に逝った幾人かの優れた人間たちがいる。この人間たちの存在は、残された者たちにとって重いテーマを課している。

チベットとの議定書の存在は、日本登山界において厳然たる意味を有していると我々は考えている。それは、HAJのナムチャ・バルワにおける歴史の証明である。

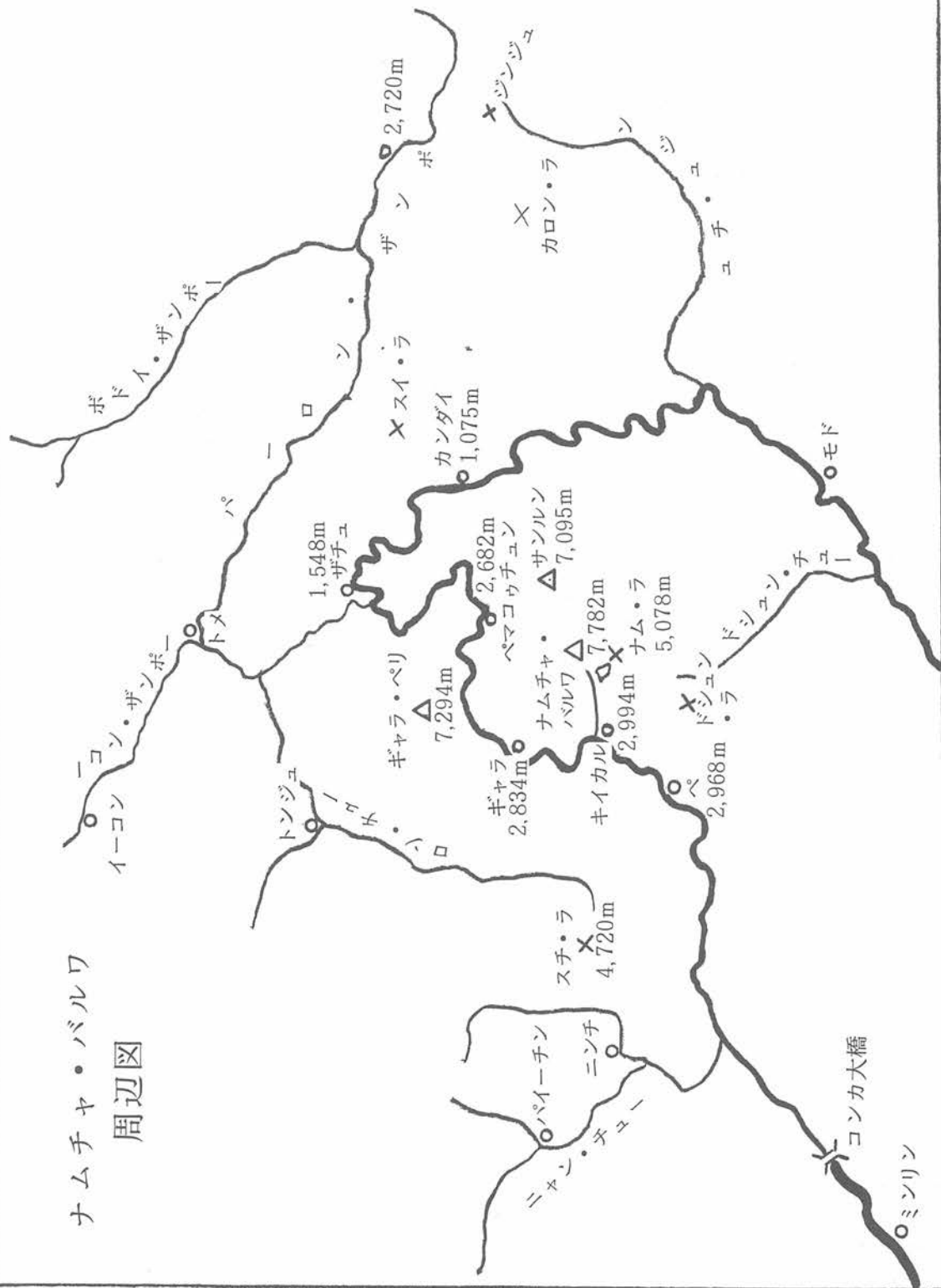
この国の登山界において、ナムチャ・バルワに対する如何なる動きが発生しようとも、何人もこの事実を無視することは許されないだけの意味を持つものである。

この事実に沿ってHAJは、ただすべきものはただし、嫌悪すべき亡霊の再生を阻止して行きたいと思う。

そして、HAJの「ナムチャ・バルワへの道」は、外部の如何なる動きにも左右されることなく貫徹されるものである。

ナムチャ・バルワ

周辺図



(II) 憧憬のナムチャ・バルワ

山 森 欣 一

1. はじめに

今から約半世紀前、ヒマラヤ登山が8,000メートル峰初登頂の黄金時代に突入する少し前は、中国、新疆のシャクスガム河、チベットのヤル・ツァンポー江、インド、ラダックのシャイヨーク河等の流域は地図の空白部と言われ多くの探査が行われた。そして、これらの大河の流域にはK2、ガッシャーブルム、クラウン、ナムチャ・バルワ、ギャラ・ペリ、ナムナニ、カン・リンポチェ、サセール・カンリ、マモストン・カンリ、リモなど岳人を魅了する高峰がそびえ立っていたのである。

その時代シプトンやティルマンはシャクスガムを探り、ウォードやラッドロウはヤル・ツァンポー大湾曲部に接近し、ティルマンやアンドレ・ロックはナムチャ・バルワを登ろうとした。そして、ティッヒーは密かにナムナニを試登し、ロバーツはシャイヨークに入りサセール・カンリを偵察した。

黄金時代にK2とガッシャーブルムはこぞって初登頂されたが、その他の高峰は我々の時代まで登頂はおろか試登もされずに残り、サセール・カンリは時代を経て1973年自国インドによって初登頂されたのである。

2. 地図の空白部を求めて

1967年の設立以来、未知と未踏への憧れを活動の中心に据えてきたH A Jにとって、シプトン、ティルマン、ティッヒー、ロバーツ等素晴らしい先達が活躍した地域が、国際政治の流れの中で手付かずのまま残されていたのは大変な幸運であったと言える。

H A Jは、1971年以来からのインド、カシミール地域での活動により、1975年には同州政府との合同によるヌン峰登山を実現させ、シャイヨーク河への足掛かりとし、同時に同年オープンしたばかりのガルワールにシプトンやティルマンの足跡を追い、リシ・パハール、サーフ・ミナールの初

登頂を成功させた。

登山の世界で先発とは言えないH A Jが、世界の岳人に先駆けてシャイヨーク河流域に入ることができたのは、インドとの長い登山交流を地道にしかも粘り強く続けた結果であった。その結果は、1984年マモストン・カンリ初登頂、翌85年日本側は登頂出来なかったもののサセール・カンリII峰初登頂、88年リモI峰初登頂として実を結んだのであった。

この時期インドの活動と平行してネパールを舞台に次へのステップとするためのカンチェンジュンガ縦走計画が進行しており、この一連の活動からランタン・リ初登頂、ムスタン地域ブリクティ・サイル初登頂、カラコルムのバツラII初登頂などが行われた。カンチ計画は多大なエネルギーを費やしたが縦走に失敗し、その後冬期マナスル登山をもってネパールでの活動を縮小した。

*

壮大なロマンであったカンチェンジュンガ計画が一段落した後、H A Jが目を変じたのが中国であった。1982年秋のことである。H A Jの目指す「未知・未踏」を十分にかなえてくれる広大なフィールドが中国にはあった。ヤル・ツァンポー、シャクスガム、黄河、長江、に代表される大河。チャンタンや四川の高原、崑崙や天山、ヒマラヤ、カラコルム、横断山脈。それらを結ぶ青蔵、川蔵、雲蔵、新蔵の各公路。永久の聖地カン・リンポチェ（カイラス）とマファモツォ（マナサロワール）。はたまた三国志、ケサル、シルクロード等々。

中国における主眼は定まっていた。それは「未知・未踏」への粘り強い挑戦であり、垂直と水平への未踏への挑戦の中心として「ナムチャ・バルワ」が据えられたのは当然であった。そしてそれはまた我が国登山界の特殊性から来る様々な障害を承知した困難への挑戦でもあった。

1984年ナムナニの偵察とチャンタン高原初入域、聖地踏査、ヤル・ツァンポー源流域偵察を実施するも、ナムナニは85年日中合同隊が初登頂し

た。

＊

1985年にはギャラ・ペリ登山について、中国登山協会からの提案で競合する二つの団体と合同登山について辛抱強くその実現を目指したが、ついに不成立となった。H A Jは一人善がりで強引な渉外は行わない。相手国を説得することもあれば、状況によって譲歩もし、機が熟していなければ条件が整うまで待つことも多かったのである。この場合は止むを得ず単独にてヤル・ツァンポー大湾曲部（グレート・ベンド）への第一歩を記し、ギャラ・ペリを偵察し、ナムチャ・バルワ北面の初撮影に成功し、凄絶な姿を世界に紹介した。そして、86年ついにギャラ・ペリの初登頂に成功し、伝説的でしたらあった大湾曲部を高所から俯瞰したのである。

3. 夢のナムチャ・バルワへ

中国、四川省の省都である成都からチベットのラサに至る飛行は、わずか1時間40分足らずの時間であるが、岳人達に東チベットの山岳景観を十分に堪能させてくれる旅である。

離陸して10分もすると、右側にスークーニャン（6,250m）の主峰が雪を装い峻立し、岩峰群がこれを守るように取り囲んでいる。この山の麓は大黃、冬虫夏草などが豊富に採れる漢方薬の産地である。登山基地であるリーロンまでは、成都からわずか1日の行程であり、チベット族の世界である。

万が一、スークーニャンを見落としても、すぐに左側に現われるミニャ・コンカ（7,556m）の堂々たる山姿を見逃す岳人はいないだろう。純白な雪に包まれたピラミダルな山頂を持つこの山は、周囲の衛星峰を睥睨するかのように一際高く聳え立っており、その美しさと厳しさを兼ね備え山姿は、一瞬息を飲むような迫力で岳人の眼を捉えて離さない。

横断山脈の主峰でもあるこの山の麓は、イ族も住むが、やはりチベット族の世界であり、登山基地となるカンティヤルーティまでは、成都から1日で到達できる。

圧倒されたミニャ・コンカの余韻に浸る岳人達

は、機がいつの間にか長江の上流である金沙江を越えたことに気がつかない。

金沙江を越える少し手前に周辺の高原に囲まれた長方形の盆地を見ることができる。この盆地には、ゲニ（6,204m）、シャラリ（6,032m）の登山基地であるリタンの街がある。

カンティからリタンを経てバタンに至る高原は、4,500mを超える標高であるが、松などの針葉樹の林が点在し、同じ高原といっても西部のチャンタン高原などとは全く趣きを異にしている。

金沙江を越えると、景観はガラリと変わる。メコン、サルウインの源流部であるこの地は、ニエンチンタンクウラ山脈の東部に当たり、標高7,000mをわずかに切る高峰が、雪を装いビッシリと立ち並ぶ。雲の間に間に次から次へと現われる高峰に近づいたのは、キングドン・ウォードらほんのわずかの人に過ぎない。未踏峰の宝庫である。

だが多くの岳人は、眼下に広がるこれらの雪山よりも、遙か前方の雲の上にあたかも軍艦のように浮かぶ二つの山魂に目を奪われることになる。

右手に広がるのがセンダン・プーを従えたギャラ・ペリ（7,294m）であり、その左手に一際大きくまるで鷹が両翼を広げたように見えるのがナムチャ・バルワ（7,782m）である。

機がドンドンとギャラ・ペリに近づくにつれて、両峰が意外に接近していることがわかる。そして、ナムチャ・バルワの主峰は天を突くように益々と高く聳え立つ。

岳人が、この指呼の間にある巨峰の間を流れるヤル・ツァンポーとその大湾曲部（グレート・ベンド）へと想いを馳せている間に、機はゆっくりと高度を下げ、広いヤル・ツァンポー江へ進入し、チベットの玄関口コンガ空港へと着陸するのである。

4. 神秘の大湾曲部

ナムチャ・バルワとギャラ・ペリを語るとき、ヤル・ツァンポー江の存在が大きく浮かび上がる。むしろヤル・ツァンポー大湾曲部の存在こそが、初期の探検では重要な課題であったのであり、その付属の成果としてナムチャ・バルワとギャラ・ペリの発見があったのである。

ヤル・ツァンポーとその大湾曲部の初期の頃の探検については、「ヒマラヤの謎の河」や「ヒマラヤの高峰」などに詳しいが、ここでは、簡単に入域の系譜を整理するに留めたい。

1979年 ネム・シン、キントゥブ

1880年 トンガン、キントゥブ

1884年 キントゥブ

1913年 ベイリイ、モーズヘッド

1924年 ウォード、カウダー

1938年 ラッドロウ、シェリフ、テラー

1946年 ラッドロウ

なお、新中国になった1974年に中国科学院が派遣した青藏高原総合科学調査隊の分隊は、ヤル・ツァンポー大湾曲部に入った。その報告の一部が「ヒマラヤ94号」に訳出されている。

また新中国となって1985年秋にH A J 隊が外国人として初めてべから左岸を下り右岸のギャラに出てキイカルを経由してべに戻った。次いで大分隊が右岸をべからペマコウチュンまで往復した。

5. ナムチャ・バルワに近付いた人々

第2次世界大戦前も、新中国となった後もナムチャ・バルワは、厳しい国際政治の中であって何時も深いベールに包まれていた。従って前述したように、ヤル・ツァンポー江湾曲部を探検した人以外にナムチャ・バルワを登山対象として入域した岳人は皆無であった。しかし、現実に入域はしなかったものの登山しようと考えた岳人はいたようだ。

ヒマラヤの高峰「サセル・カンリ」の項に「アンドレ・ロックが1939年のガルワールへ行く前、このナムチャ・バルワを頭に描いていた。そして友人でヒマラヤ研究家のマルセル・クルツの許に相談に行ったところ、あそこは雨が多いから止せ（1年間12メートルの雨量）と忠告されて、ガルワールに変更した、と彼は本にかいている。」と紹介されている。

また、水野勉氏はヒマラヤ128号で「ナムチャ・バルワを登ろうとした登山家がいたのだろうか。それはたしかにいた。H.W.ティルマンである。」として1945年10月にティルマンが、ナムチャ・バルワへの許可についてF.M.ベイリイ宛てに出し

た手紙を紹介している。

かくして、ナムチャ・バルワが存在するチベットが、新中国によって明確に中華人民共和国の領土となり、その後チベット動乱、中印戦争、文化大革命などの嵐が続き、中国国内の不安定な情勢もあって外国人がナムチャ・バルワに近づくことは不可能であった。

*

中国隊はどうしていたのであろうか。1956年からソビエトの指導の下に登山運動が始まったのであるが、チョモランマ登頂を終えた1960年12月には、チベット登山隊がギャラから北西稜5,000mまで到達している。これ以後は20年間のブランクがあり1980年春に調査隊が入山した。本格的な偵察調査は、1982年夏を第1次として、1983年春第2次、夏第3次を派遣した。第2次の偵察においてナイプンの初登頂に成功したものの主峰には手を付けることは出来なかった。

そして、本格的な登頂を目指して1984年春に王振華隊長以下27人を送った。ちなみに、この登山隊隊員は前年の秋に四川省北部松潘県にてナムチャ・バルワへ向けて合宿を行ったが、この合宿にH A J では中国登山協会と協議の上、故角田不二と吉田憲司の2名を岩登り技術指導員として派遣した。さらに、登山隊が高所で使用する軽量化した登攀用具、テント、ガスコンロ、ガスボンベなどの物資を贈り、中国隊による初登頂を願ったのであった。結果は再度ナイプン峰に登頂したに留まった。

以後、ナムチャ・バルワについては、中国側の状況に変化があり、1986年H A J とチベット登山協会の間で議定書が交換されて以来登山は実施されていない。

6. ナムチャ・バルワの位置と山名

ヒマラヤ山脈の東端と思われていたナムチャ・バルワも実は更に100キロメートル東まで岩盤が続いていることが中国の研究で判明したと言う。また、ナムチャ・バルワ周辺は中国でも有数の地震発生地帯であり、特に1950年の地震では村々が壊滅状態になったと言われている。このため、ペマコチェンが無人となったのもこの地震のためで

あるとの説もある。事実その凄さを実感したのは、1985年にギャラ・ペリの偵察でこの周辺で情報収集した折りに、住民達の中には1959年チベット動乱で四川省西部からインドへ逃亡しようとして間に合わずに、このヤル・ツァンポー江ゴルジュの村に移り住んだと聞かされた時であった。

ナムチャ・バルワの位置については、1985年に発行された周正氏の「氷山雪嶺二千年」と「岳人451号」に発表された中国登山協会委員李舒平氏の「ナムチャ・バルワ峰登頂を目指して」によれば北緯29度37分51秒、東経95度3分31秒であり、この数値はケニス・メイスン「ヒマラヤ」付録Aの数値と一致している。

山名の意味、謂れについては諸説がある。コンサイス外国山名辞典によれば「稲妻が上空に赤く燃えているの意」。前出の雪嶺はチベット語で「天から落ちて来た石ころの集まりの意」。更に李氏は古代チベット語でナムチャは「天を持ち上げる」と言う意味であり、バルワは「英雄」だから「天を支える英雄」と解すべきとする。

伝説もある。古くペイリイは「ヒマラヤの謎の河」で「ナムチャ・バルワとギャラ・ペリは、ドルジェ・パモの胸部と考えられている」とし、「このドルジェ・パモ、金剛石の雌豚の化身は、ヤムロク・ツォのサムディン僧院に住んでいる」と解説した。また、C.アレンは「チベットの山・(宮持優訳)」で「その山に二つの巨峰がそびえていた。それは現在ナムチェ・バルワとギャラペリで知られた、テムチョクの妻、ドルジェ・パンモの乳房であった。」とネム・シンとキントアップの話を伝えている。私は85年偵察の折りに地元でギャラ・ペリの山名を調査している時に、右胸がナムチャ・バルワで左胸がギャラ・ペリであるとの言い伝えを聞いた。更には「ギャラ・ペリの頂上付近の右(南)半分が無いのは、サムエに運ばれて10階建ての建物になっている。その建物は人間が建てたものではない」との言い伝えも聞いた。

「雪嶺」には伝説として「ナムチャ・バルワ峰は神の山で、山頂には仙人が住んでいる。仙人の御殿は、金色に輝く七つの宝の塔で——」を伝えている。ナムチャ・バルワの見事な頂上三角錐は西面を向いており、正に金色に輝く姿を見ることができた。

ちなみに最近日本でも発売されたナムチャ・バルワの地図からこの七つの宝の峰を想像してみると主峰と西北西稜上に並ぶII、III、ランジャプー、V、5,976m峰とナイプンなどが候補であろう。

7. ナムチャ・バルの山姿

ナムチャ・バルワは、主峰から西北西と東北東にそれぞれ長大な尾根を派生しており、南に短く切り立った稜が落ち、ナイプン峰に続いている。

西北西稜は長大で幾つもの顕著なピークが林立しているが、それらを仮に以下のように呼称する。

7,344mピーク＝II峰

7,146mピーク＝III峰

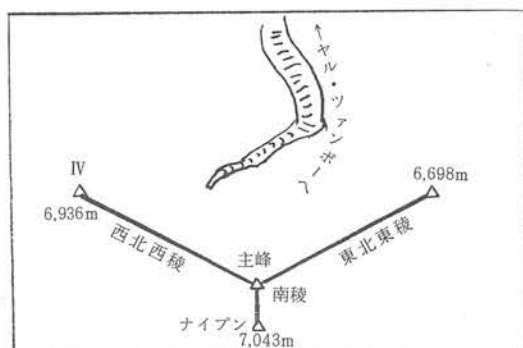
6,936mピーク＝IV峰(ランジャー・プー)

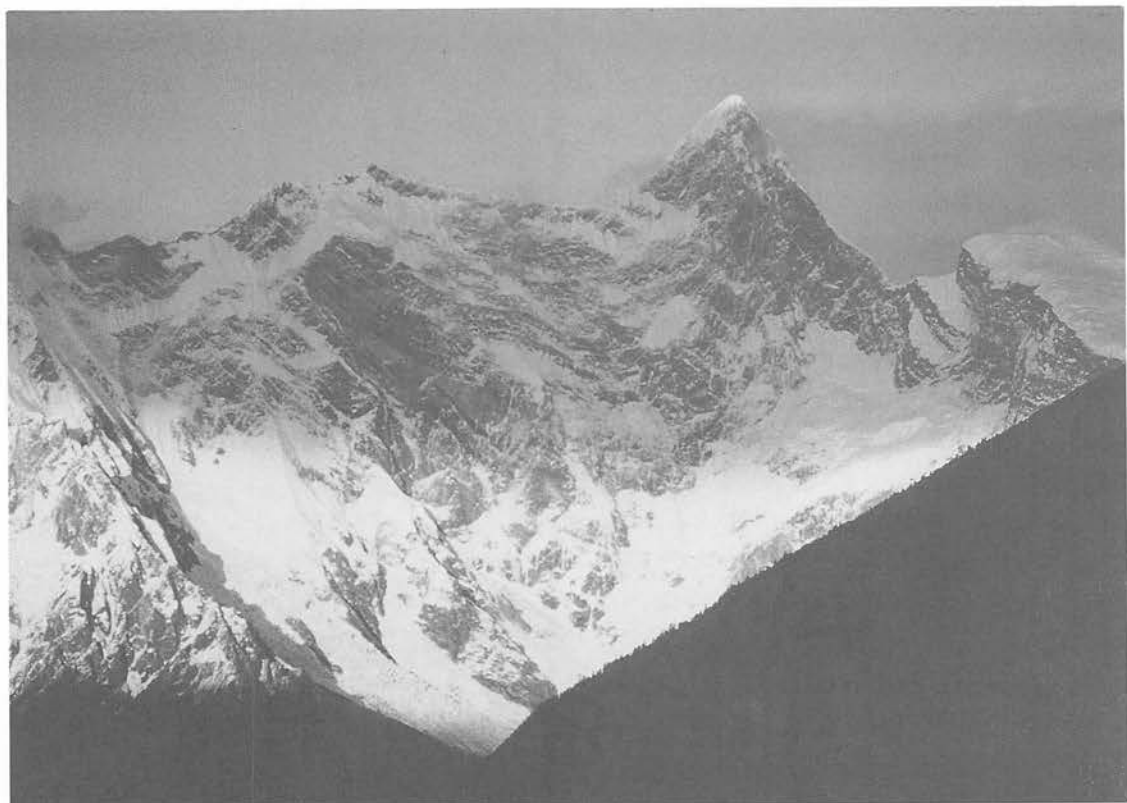
6,442mピーク＝V峰

東北東稜には顕著なピークはなく、東北の肩まで短く切れ落ちた後、サンルン峰(ナムチャ・バルワから直線で約8.5km)との最低コルまで比較的なだらかな稜線となっている。

空からみるとまるで鋭い嘴を持った鷹が両翼を広げたように見えるナムチャ・バルワであるが、南のナイプン、西北西稜上のV峰、東北東稜から続くサイルンの西の肩ともいべき6,698m峰を直線で結ぶと、日本酒を飲む薄い盃のような形が出来上がり、あたかもこの盃で北面直下を流れるヤル・ツァンポーの水を飲み乾しているようかのようである。

また、ナムチャ・バルワを概観すると、西北西稜と東北東稜に囲まれたこの盃の部分に向かって多くの尾根が派生しており、大部分は雪に覆われている。





これに対して西北西稜の西面や東北東稜の南面（実際には未見であるが）は、主に傾斜の強い岩壁で構成されている。

8. 西面の観察

●アプローチ

前述したようにキイカルまではトラックが入るので全く心配はいらない。

●ルート

西北西稜は主峰に近づくほど急峻な壁となっておりとり付く島がないように見える。III峰から下部に取り付くのは北面と同じ理由で問題にならないだろう。

わずかながら希望を抱かせるのがII峰とIII峰から派生している小リッジである。これもその年の降雪量や季節によって部分的にでも岩壁が露出するなどした場合は極端に条件が悪くなりルートとはなり得ないかも知れない。

チベットとの議定を元に1987年春の偵察計画が練られた。ルートは、中国ルートとも言うべきナ

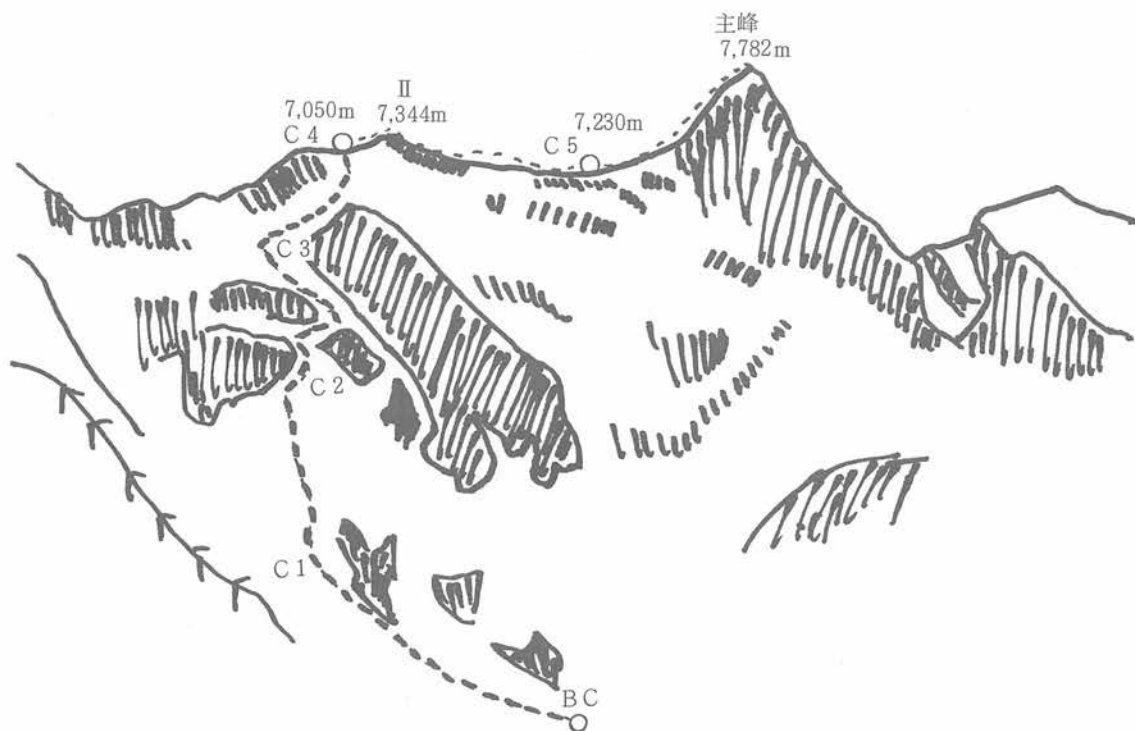
イブン峰経由を主とし、もう一本のルートとしてII峰直下に出るラインを引いた。それが13頁のルートである。III峰から派生する尾根はこれに比べると大きいようであるが、稜線上に出てからII峰への登りが北面から見るとかなりの壁になっており困難ではないかと思われる。

9. ナイブン・ルートと南面

中国隊が二度登頂したナイブン峰経由のルートである。誰がみてもナイブン峰と南稜とのコルへの下降と、南稜（広い壁状である）の登攀がポイントになる。

南面側の写真を見ていないが、今回発行された地図を見る限り、ナイブン峰の北東側はゆるやかな雪面のようにも思われるので、コルへのルートがこれによって確保されれば一歩頂上へ近づけるようである。

もっとも南稜そのものも1,000メートルの標高差をもつ巨大な壁であり降雪や積雪の状態によっては西面以上の困難が予想される。



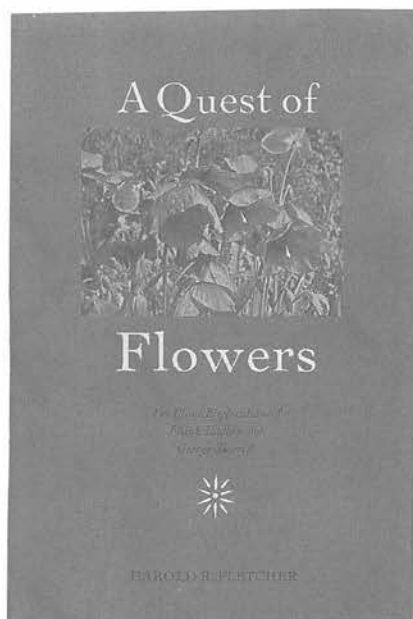
一方、古くから将来ナムチャ・バルワの登路になるのではないかと指摘されていたキイカルに流れ出る川からのルートがある。中国隊のルート図によれば、4,650m付近までキャンプを進めて偵察を試みたようであるが、ナイブン峰とのコルへのルートは発見できなかったようである。コル直下の岩壁帯に問題はあるが、他にルートの見通しが立たない時は、このコルへの道も一考の余地はありそうに思われる。

ちなみにこの「ナイブン」峰について、ラッドロウは、H J 12号の報告で「Atsam Ne」と呼んでいる。私が1985年ギャラ・ベリ偵察の時に地元民から聞いた名は「ネボン」と発音していた。

キングドン・ウォードは、ドション・ラを越えて南へ下り、またナム・ラを越えて南に下ろうとしたが困難を極めた。

現在のところ南面に入るためにはナイブンから続く尾根を越えなければならないが、下るための困難さと下った後の取付までのアプローチを考えると、現実的ではないと思われるが、輸送の問題

がクリアーできた場合は、東北東稜6,796mピーク付近から派生する尾根が現実的なルートとなるのであろう。



10. 北面の観察

●アプローチ

この面から西北西稜、東北東稜に取付くためには、少なくともベマコウチュン付近にベース・キャンプを設けなければならない。

キイカルまではトラックが入り、ギャラまでは馬が使えるので問題は少ない。この先が大変である。1985年10月にギャラからベマコウチュンまで到達した大分隊の記録は、乾期のため川床を歩いているが大きな石を登り降りするだけでも相当の苦勞をしており、大部隊となると隊荷のトランスポートが大きな問題となるだろう。

●ルート

西北西稜III峰から下部に取付いても、稜上に出たから主峰までの距離を考えると長すぎるので、当分の間はこの面はルートにならないと思われる。

現実的なルートとしては、北面の主氷河をつめて、6,668m峰から派生している尾根をたどり、主峰とII峰のコルに上がる案が考えられる。

また、6,668m峰から東北東稜北面の6,800m付近の稜上に出る案も考えることができる。

ただ細部については資料不足であるが、ギャラ・ペリからの写真によれば、中間部でかなり急峻な雪壁となっているように見えるので、雪崩の

可能性などを考えるとルートとなり得るか疑問でもある。

11. 登攀の季節

ナムチャ・バルワの現実的なルートは、現在のところ西北西稜西面か、ナイプン峰経由に絞られると思う。

それでは登攀季節は春か秋か、はたまた冬か？中国隊の報告によれば、4月が最も登攀に適し、5月中旬には雨期が始まるようだ。また、9月、10月も登山に適し、好天が半月も続くことがあるとされている。

しかし、HAJの1985～86年の9月～10月の経験では9月は雨が多かった。10月は確かに好天が続く可能性が高い。それも中旬の2週間位は安定しそうである。

傾斜の強いミックス壁が下部にあり最後は、氷雪壁となる西北西稜ルートと、雪崩の巣とクレバス帯を下部に持ち、最後に1,000メートルに及ぶミックス壁を登るナイプンルートでは、用いられる戦術も違うと思われるが、いずれにしても、この岩壁を登攀するには全天候型（今はやりの24時間戦える）アルピニストでなければ通用しないだろう。

一刻も早くグレート・ベンドの巨人と対峙したいものである。

ナムチャ・バルワ 概念図



ナムチャ・バルワ峰を科学調査

——北京週報No.49 (1986.12.9) ——

ナムチャ・バルワ（南迦巴瓦）峰（以下ナ峰と略す）はチベット自治区の東南部に位置し、海拔7,782メートルで、世界の15番目の高峰である。世界の7,500メートル以上の高峰において、これまで人類に征服されていないもっとも高い処女峰でもある。ナ峰はヒマラヤ山脈の東端にそびえ、ナンチェンタングラ山脈と横断山脈の合流するところにあるので、地理的に独特で、重要である。

中国科学院は1982年から1984年にかけて、科学調査登山隊を組織し、ナ峰に対する大規模な総合的科学調査を4回行った。調査に加わったのは地学、生物学、大気物理学など21の学科の100人余りの科学者である。調査の範囲はナ峰を中心とするヤル・ツァンポー江の大きく湾曲したところの内側を主とし、付近の四つの県に及んだ。

世界でもっとも高いところを流れる大河ヤル・ツァンポー江はナ峰を急に回って南へ流れ、世界でも有名な大湾曲渓谷（以下大湾曲と略す）を形成した。大湾曲は平均切断深度が5,000メートル以上もあるので、世界の地理的条件において、カーブの変化がもっとも急激に生じたところとなった。

地学面から見れば、ナ峰地区はいろいろな構造（プレート構造を含む）の合わさったところで、東西、東北と西北の三大構造系統が現われたので、ナ峰は強く上昇した断層からなったものであり、ナ峰を回るヤル・ツァンポー江は多方向の複雑な地質構造にもとづいて形成された川であることが分かった。

ナ峰の岩石の絶対年齢は7億4,900万年で、古いインド地台の地質年齢とだいたい同じなので、それがインド地台の北へ伸び出した部分に属することは明らかである。地球磁気測量は次のようなことを示している。中生代白亜紀に、ナ峰の位置がいまの北緯13度に相当するところにあったから、

インド・プレートの一部であるナ峰は、それから陸地の移動につれて北へ15度移ったことが明らかである。

青海・チベット・プレートに急降下しているインド・プレートの東北部にあるナ峰地区は、地震がひん繁に起こる。1950年8月15日にマグネチュード8.5の大地震が起きた。このほか、多くのところで高温地熱活動も現われた。

ナ峰をはじめ東ヒマラヤ地区が海域から陸地になった時期はヒマラヤのその他の地区よりはるかに早かった。第4紀に入ってから、ナ峰は激しく上昇し、中更新世になってから、その大部分はすでに雪圏内に入った。それから、少なくとも氷河期が3回、間氷期が2回訪れた。氷河期の氷河はナ峰にはっきりした、完全な跡を残し、中国の海岸性氷河のなかで前例のない独特なタイプもあれば、世界の氷河のなかでまれに見るタイプもある。

ここは中国でもっとも揃った、もっとも整った、もっとも典型的な垂直自然帯地区であり、熱帯雨林帯から寒帯氷雪帯までの九つの垂直自然帯を含む。自然帯のそれぞれの高さのところに、豊かな自然資源が埋蔵されている。また山の南側と北側の自然条件はきわめて大きな違いがある。東南側の傾斜地のメド地区は中国の有名な多雨地区で、高原の「シーサンパンナ」と言われている。水蒸気とその熱量が大湾曲の通路に沿って北へ移動したので、熱帯、亜熱帯の自然帯も同じように渓谷に沿って北へ移動し、ヒマラヤ山の北側のイゴン、ボミのあたりに「チベットの江南」といわれる自然景観が現われた。

生物面の調査によると、ナ峰地区には、チベット高原のすでに判明した高等植物の種類の3分の2を占める300余種が集中している。ここはまた、真菌の天然の「豊庫」で、大型真菌総数の約80パーセントを占め、中国の大型真菌の60パーセントを

占めている。

ナ峰の東南側のふもとのヤル・ツァンポー江下流の溪谷地区は中国のヒマラヤ生物区系の要素がもっとも豊富な地区であり、ヒマラヤ特有の種がもっとも多い地区でもある。この地区に分布している独特の植物が100種もあり、そのうちの多くは群生している。

生物の種類の分化は昆虫のなかにはっきりと現われている。新しく分化した地区特有の属が多く現われた。例えば無菌蝗 (*Aserratus*)、狭腿蝗属 (*Tenuifemnrus*) などがそれである。この地区にはまた、「生きた化石」といわれる多くの古生物がみられる。

科学者たちは両生爬虫類の標本を類百も採集した。分析によって、この地区に両生類が20種あり、爬虫類が25種あることがわかった。二つの新しい種、つまり網紋扁手蛙 (*Platymantis reticulatus Zhao etli*) と平鱗樹蜥 (*Calotes medogensis Zhao etli*) とが発見された。またナ峰錦蛇 (*Elaphe hodysoni Guenther*) が国内で初めて発見され、眼鏡王蛇 (*Ophiophagushannah Cantor*) がチベット自治区で初めて発見された。

このほか、ナ峰地区の独特の気候により、生物に一連の異常な分布法則をもたらした。例えば、ここの大眼鏡蛇 (*Najahannah*)、蛇蜥 (*Ophisaurus gracilis*)、棕頸犀鳥 (*Aceros nipalensis*)、孟加拉虎 (*Panlhera tigris bengalensis*)、長尾葉猴 (*Presbytis entellus*) はいずれも通常分布する緯度または海拔の高さを超え、分布の北限あるいは垂直分布の最高限度に達した。

大気物理と気候学者はヤル・ツァンポー江とその支流バルルン・ツァンポー江の上空に気象観測用気球を100箇、水平移動気球を50箇上げ、それに地上ステーションでの気象観測を加えて、ヤル・ツァンポー江下流にある大岐湾地区の水蒸気通路の役割を確かめるうへのオリジナルな資料を手に入れた。分析によって次のようなことがわかった。——ヤル・ツァンポー江下流の溪谷は青海・チベット高原のもっとも主要な水蒸気通路であり、水蒸気の流れは主として大岐湾で南から北に向かい、その高原への水蒸気移動量は、高原の周辺から高原内陸部への水蒸気移動量の2倍ないし5倍で

あった。したがって、それは高原の降雨量に大きな影響をおよぼしている。

ナ峰地区は豊富な水力資源、森林資源、十分な温水条件に恵まれるので、チベット高原が欠く熱帯、亜熱帯植物、例えば水稲、茶、果物および熱帯薬草などを栽培するうえに、きわめて大きな潜在力と明るい見通しがある。とくに、汚染がきわめて少ない原始状態の自然環境や、国家A級の希少動物は、中国の高山観光、登山、科学研究事業を発展させ、高山自然生態保護区を設立するすばらしい場所である。ナ峰地区にあるメドは今年7月、面積6万2,000ヘクタール余りの国家級自然保護区として、國務院に認められた。

ナムチャ・バルワの高度の変遷

◎1912年 [7,756m]

インド測量局のオックス太尉とフィール太尉によって南のアボール地方から観測された。

◎1983年 [7,762m]

中国国家測量製図部門の最新の航空測定の結果として発表された。

◎1984年 [7,782m]

中国通信はナムチャ・バルワの報道記事でこの数値を使用した。最近発表された中国登山協会と中国国家測絵局測絵科学研究所の編集による「南迦巴瓦峰登山図・縮尺1:50,000」にも使用されている。

A Quest of Flowers に収録 されているグレート・ベンド関係の写真

P208 トリペから見たナムチャ・バルワ西面

P254 テモ・ラから見たギャラ・ペリ西面

〃 ツァンポーから見たキラビンゴ (ナムチャ・バルワ支尾根上の岩峰群)

P259 ドンキュウ川から見たギャラ・ペリ北西面

P267 ギャラ村から見たギャラ・ペリ南陵下部

P279 ツァンポーの流れ

〃 ペマコウチュン付近のツァンポーの流れ

P283 ツァンポーのキントゥ滝

ギアラ・ペリ
&
ヤル・ツアンポー



(I) ギャラ・ペリ偵察 1985年

山 森 欣 一

1. はじめに

—ヤル・ツァンポー河は世界でも最も山岳重畳とした困難で荒涼たる地帯を縫って、南チベットの最も開けた地方をぬけて真東に流れている。—これは「ヒマラヤの謎の河」の一節である。ヤル・ツァンポー河は、今や「謎の河」ではなくなったが、大湾曲部だけは依然として「謎」である。その大湾曲部に、この大河「ヤル・ツァンポー」を挟んで二つの注目すべき未踏の高峰がある。南にナムチャ・バルワ、北にギャラ・ペリである。ナムチャ・バルワは既に中国隊が二度にわたり登頂を試みたものの、現在もその頂を明け渡していない。そして、もう一つのギャラ・ペリは、試登はおろか写真すらほとんどないのである。

HAJでは、国内の他会との合同で来年に登山隊を派遣すべく許可を取得した。ギャラ・ペリは、チベット解放後はじめて登山者を受け入れることになったのである。今回の偵察は4人で実施する計画であったが他会の都合により、HAJのメンバー2名によってその西面側が探られた。以下はその概要報告である。

2. 北面・東面を断念する

9月10日、東京を発った三浦と私は、北京、成都と飛行機を乗り継ぎ12日にラサに入った。成都からの機内では、ナムチャ、ギャラの両峰の雄姿を十分にみることができ心は早くもヤル・ツァンポーへと飛んだ。ところが登山協会からの迎えが来ない。已むを得ず市内行きのバスに乗って行くと車が長蛇の列を作って止っていた。事故らしいとの話が伝わり、先頭まで行ってみると、その事故車は我々を迎えに来た登山協会のバジェロであった。バジェロの左側ドアはトラクターの車体に張り付き運転者は即死であった。

最初から縁起の良くない出だしであったが、ラサでの準備を終えて15日には林芝へ向かった。ラサから東へ約150km行くと標高約5,000mのメラ峠

を越える。この峠の周辺にはヤクを追う遊牧の民がいた。峠を一気に下り清流が目につきはじめると、標高約3,300m付近から大きな木が目立つようになり、行き交うトラックもほとんどが木材を積んでいる。ラサから8時間ほどで「八一鎮」に到着した。風が強く砂塵が舞う中、体育学校の宿舎に入る。チベットの登山協会はもともこの地にあったらしい。北京の許競先生の指導の下にラサの貢布先生らもこの学校の建設に携わったとのことである。

翌日は林芝に向かった。八一鎮から車で20分も行くと、この地方の中心地である「林芝」である。ここでギャラペリ北面や東面の情報を集めていると、驚いたことにその内の1人が、ノイズが編集した「World Atlas of Mountaineering」に載っているギャラ・ペリの写真と全く同一のものを持ってきた。聞けば1983年2月に自分が撮ったものと言う。勇躍東面をめざして林芝を後にし、「東久」へと向かう。途中4,700mの峠を越えて、アルプス風の谷「ルナング」を経て、北面の村である東久に着く。既に標高は2,570mまで下がっている。

打ち合わせでは、我々が目指す北面は全く人が入っていないこと。東面は「門仲」までは行けるが、荷を運ぶ人を集めるのに4日間必要。キャラバンは道を切り開いて、はいつくばって往復10日間必要であること。来年の本隊時でもポーターは30名位集めることはできる。等々、偵察期間の短い我隊にとっては誠に残酷な状況であった。ここでも再度東面の写真を見せられ、心は早やくもその姿に引きつけられてはいるものの、偵察隊の任務と来年本隊時の状況を考えると、到底東面に入ることは不可能（4人であれば何とか分散できた！と後悔する）と判断し、東面行を断念した。

3. ペからベースハウスまで

東久から再び八一鎮に戻った我々は、17日小雨の中を「ペ」に向かった。公安局でヤル・ツァン

ポー河の橋を渡る許可書をもらい南へ下る。1時間ほどでヤル・ツァンポー河を渡り更に上流に向かい、ペを所轄している「米林」に行く。これは、ペ付近で馬やポーターを手配するためには、県の承認が必要なためである。松林や白樺の続く素晴らしい道を走ると、この付近ではとてつもなく美しい米林となる。チンコー酒を一杯飲んで、ペへ向かう。ヤル・ツァンポー右岸の道は下流に進むにしたがって徐々に細くなり、右側から幾本もの川が合流し、水流の浅瀬を探しながら、ジープとトラックは走る。

八一鎮から150kmほどでペに到着。ペでこの地区の責任者に偵察の目的を話し、協力を依頼する。この先「大渡卡」で左岸に渡る舟があるとのことなので出発する。道はかろうじてあるような場所であるが、「ニディン」の部落まで行くと全く渡河できるような水量ではなく「ペ」で渡らなければならない！とのこと。我々は結局彼等の「塩」を運ぶために来たようなものであった。

再びペに戻り前後策を協議する。結局明日このペ区の幹部と一緒に左岸に渡り、馬やポーターの手配をすることになる。中国登山では通訳の占める比重は大きい。連絡官と通訳と隊長がうまく連携をとれる状態でないと行く先々で不都合が生じる。今回の通訳は、21歳の大学生であるが私達とは馬が合った。連絡官はチベット人であるが、チョモランマから下山したばかりなのと、連絡官としては初めての隊であるため、少々とまどいがあったようだ。酒の大好きな人である。

9月18日、昨夜は満天の星空だったので好天を期待したが本日もしどよりとした空で今にも降り出しそうである。10時にはヤル・ツァンポー河岸に行き舟を待つ。向こう岸に舟が2隻見えるが、なかなか来ない。2時間待つてようやく舟が来た。馬や自転車に乗っている舟は、丸木舟を二つ横につないだ簡単なものであった。12人と約500kgほどの荷を乗せて10分間ほどで左岸に渡った。

連絡官とペの幹部が村へ馬を呼びに行った。結局彼等が帰って来たのは5時間後であった。4頭建ての馬車に荷を積み、ジープ1台位は通れそうな道を1時間ほど行くと「ティンベ」村であった。猫の額ほどの草地にテントを張り、夕食をしなが

ら、村の幹部達と話し合う。

ここで分かったことは、①この地方は定量経済なので人（ポーター）を集めるのは困難。②人は荷を担いでも15kg。③人を集めるのには通知を出すために時間がかかる。④ギャラ・ペリとは呼ばないで普通は「ギャラツェドン」と呼ぶ。⑤途中から馬は使えず人が運ぶ。⑥道がないのでガイドを連れて行く。彼はギャラツェドンの近くまで行ったことがある。

9月20日、11時過ぎに馬が10頭来た。落葉樹の中をのんびりと進み、途中スースンの部落を経て15時過ぎ本日の泊まり場タリンに到着。標高約3,000m。我々のポーターにインドへ逃げてビルクッパに25年いたチベット人がいた。母親がスースンにいて年老いているため、カトマンズ〜ザンムー経由で2年前に戻って来たと言った。母親が死んだら再びインドへ戻りたいとのことであった。ラサの博物館には、インドから舞い戻った人々の統計があったが実態はどうなのであろうか。

21日、昨夜から12時間雨であった。ここで荷物が多すぎて運べない（人がいない）と申し入れがあり食糧を中心に荷をデポした。（BHから取りに来る約束）13時半馬で出発。15時半チュベでキャンプとなる。一軒だけ家があり多分左岸では、ここが最後の人家である。

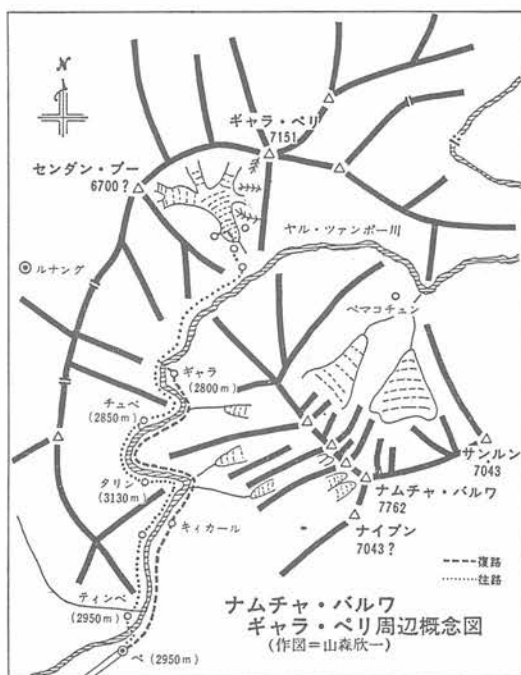
22日、久しぶりに雨が降らない朝であった。ヤル・ツァンポー河は、ナムチャ・バルワとギャラ・ペリの支尾根によって曲がりによって曲がっている。10時40分に出発し、雑木の多くなった踏み跡を探しながら進み、15時キャンプ地着。完全に林の中である。夕方木々の間からようやくギャラ・ペリの雄姿を垣間見ることができた。下部の岩壁が異様に強調されて見える。

23日、朝8時で8℃、標高2,810m。9時30分出発。踏跡が完全になくなり、鈍目を頼りに雑木を払いながらの前進である。沢に出会えば立木を倒しての橋作りで1時間はかかる。昼は2時間お茶を沸かしてじっくり休む。歩けば15分で30分休む。これの繰り返しで背負っている隊荷は15kg。泣けてくるキャラバンである。ポーターの焚火の煙に刺激されて、上の岩壁にある巣から大型のハチが飛んで来て大騒ぎだ。連絡官やコックも顔や頭を

刺された様子。16時過ぎギャラの対岸付近のカルカでキャンプ。

24日、昨日はキャンプ地に着いてからポーター側から様々な要求があった。①ここまで道が悪く疲れたので明日は休み、②明日行くなら1日分給料をくれ、今日はBHに着くとかで意外に早く9時過ぎに出発したが、結局は15時50分水のある沢に出た所でキャンプ(20時まで明るいですよ)。

25日、相変わらずの雨。相変わらずの要求。面倒くさいので10時過ぎに一言「行こう」と言いテントをたたむ。11時40分出発。自分の荷物をデポしたりして、今日は本当にBHに着くつもりらしい。雑木も激しくなり伐採しながら進み16時沢に出る。橋を架けている内に、「ここまでの約束なので帰る」と言う。已むを得ず、下に見える河原をBHとすることにしてそこまで荷を運ばせる。連絡官の説明では4人を残してデポした荷物の荷揚げに従事させると言うので了承した。



▲1986年当時作成の周辺図

4. 偵察活動

BHで休養をとった後27日には、連絡官、コック、通訳の5人で上部のルート偵察に向かった。踏跡がある雑木と竹林を過ぎると、突然シダ類の密生する広場となる。ここは大きな獣が遊んだと思われる跡があり気持ちが悪い。あちこちと迷いながら獣道を拾いながらようやく、下の河原が見える所まで出る。ところがここから河床へ降りるためには、背丈が2~3m位あるトゲの木の密生した林を切り開かなければならなかった。

翌日からルート整備と荷揚げを2人で行う。この頃、対岸のギャラ村から猟師が4人と犬が8頭登ってきた。熊を撃ちに來たと恐ろしいことを言う。通訳は、我々が上部に行っている間に猟師が子熊を担いで來たと報告。

9月30日に10日間分の食糧を持って2人で上部へ移動した。更に氷河上約3,550mに今回のBCを設営した10月2日には、天候は完全に好天に向かい偵察期間中持続すると言う幸運に恵まれた。

10月8日には、十分とはいかないにしても、一通りの登路偵察を終えてBHに帰幕した。

ギャラ・ペリ西面に喰い込む氷河〔仮称・ギャラ・ペリ氷河〕は氷河としての規模は小さい。こ

の氷河が、ギャラ・ペリ西峰(双耳峰である)から西に延びる稜線を経てセンダンプー(6,309mとなっているが、空から見た印象などを加味してギャラ・ペリより300~400m程度しか低くないのではないかと思います)となり、更にセンダンプーから南東に延びる稜線と、ギャラ・ペリ主峰の途中から南に延びる稜線に囲まれ、馬蹄形状を成している。主氷河の中央部の幅をロープで測って見たら約300mであった。

ギャラ・ペリ西面は、双耳峰となる主峰南稜と西峰にかけて傾斜の強い岩壁層を形造っている。この中に何本かの稜があるが、ルートとしては、主峰南稜上に突き上げる2本を予定ルートとして偵察した。南稜上に出た所からは忠実に南稜を辿り頂上真下で西峰へ続く稜線に出て頂上へ至ることになるだろう。

センダンプー峰については、空から見ても大きな山と言う印象であったが、実際にその下に立ってみても、ギャラ・ペリと800m低い山とは到底信じられないほど立派な山姿であった。特にその南東面は純白な雪一色であった。登攀に価する山と言えるだろう。

ナムチャ・バルワ峰北面についても触れなけれ

ばならないだろう。頂上から北西面に長大な尾根が出ているが、この稜線上には立派なピークが四つほど見られた。主峰は西面側から見た頂上岩壁が立派な三角錐であるのと同様に北面側も三角錐状となっている。北面側には大きな氷河が見られるが、残念ながらベマコウチュンまで隊荷を輸送するために空輸以外には考えられず、現状では北面からの登山は困難であろう。

5. BCからラサまで

好天気のと来と共に少し樹々も紅葉し始めた10月8日、BCを撤収しBHに下った。9日夕方にはギャラ村から10人（女2人）のポーターがやって来た。翌日には村の対岸まで下り、11日にはヤル・ツァンポー河をイカダで渡りギャラ村に入った。ギャラ村は12家族61人が住んでいる。この河の最奥の部落である。穀物の集積場の広場にテントを張った我々は、見せ物のようなものであった。

10月12日、村の住民の半分位が、村はずれまで我々を見送ってくれた。対岸の道に比べるとまるで天国のような道を進む。樹々はすっかり色づき、時折り河床に近づく所では、丁度秋の上高地、徳沢のような雰囲気である。一カ所岩壁帯に道が拓かれており、ここの通過では馬から荷を外し人が運ばなければならなかった。午後4時過ぎ大分県のトレッキング・チーム6人がキャンプしている場所に到着し、我々もテントを張った。

翌日は長い道程となった。途中キイカルの部落の手前から雲の間にナムチャ・バルワが見えた。手の届きそうな所に聳え立つ雄姿に感激する。往路にデポした荷物が結局はBHに上がらなかったため、BHから下山する日から昼食は抜きになっ

ていた。この日は結局出発してから11時間後の20時半に真っ暗なべに到着した。

10月15日 ペの招待所を出発。途中大分隊のキャンプに寄りムツゴロウ先生に会う。米林県に立寄り副主席等数名の幹部に会って、来年の登山についての協力を依頼する。翌日は紅葉の一段と美しくなった道を走り（ジープのスプリング板が折れて3時間待ちとなったが）少々雪の積った峠を越して、20時50分ラサの招待所に到着した。

6. おわりに

ギャラ・ペリ登山を左右する第一の要因は、ヤル・ツァンポー河の水位である。ラサ、八一鎮、林芝、米林、ペ、その他この左右兩岸の住民達の渡河時期に対する意見は一致しない。今回の偵察の結果から推定して登山時期を決定しなければならないが、年によって当然時期のズレがあることを前提としなければならないだろう。

第二は、ギャラ・ペリ周辺の気候である。基本的にはモンスーン気候ではないか？ と考えて見たが、これも甚々資料不足である。雪の来る時期や、積雪量についてもまちまちの回答であったが、11月には南面、西面に雪が到来するようである。

第三は、ポーターである。ネパール、インド、パキスタン等と違って、ポーターは県の命令によって動き、荷を担ぐ習慣がないのである。そして人口が圧倒的に少ない。100人のポーターを同時に雇用することは困難である。

その他動物や植物による被害も予想されるが、山自体は四方から可能性のあるルートが頂上へ続いており、登山隊にとっては魅力ある山と言えるだろう。

(II) ギャラ・ペリ初登頂 1986年

尾形好雄

1. プロローグ

チベットの西部、聖地カイラス山の近くに源を発したヤル・ツァンポー江は、チベット高原の世界で最も山岳重畳とした荒涼たる大地を約1,500km東流した後、突然流れを南西に転じて大ヒマラ

ヤの主軸を貫き、アッサムの平原に向けて南流する。アッサムに入ってその名をブラマプトラ河と変えるこの大河は、さらにバングラデシュを流れてベンガル湾へと注ぐ。その流れは、源流から約2,900kmもの万里行をなしている。

前世紀までは、このヤル・ツァンポー江とブラ

マプトラ江が同じかどうかハッキリ解明されず、ヒマラヤの「謎の河」とされていた。

何故、「謎」とされたかと言うと、それは、このヤル・ツァンポーとブラマプトラのつながり部分、即ち、「グレート・ベンド」と称される大湾曲部が非常に深い峡谷を成しているために誰も近づけなかったからである。

この謎を秘めた大湾曲部にツァンポーの大河を挟んで二つの高峰が対峙している。南（内）側にナムチャ・バルワ（7,782m）、北（外）側にギャラ・ペリ（7,151m）の玉峰がそれである。

ナムチャ・バルワは、世界の未踏峰の最高峰として世界のヒマラヤニストが虎視眈眈と狙っており、これまで中国隊によって三度にわたり偵察・試登が行われたが未だにその頂は登られていない。

一方、この対岸に聳えるギャラ・ペリは、試登はおろか全容写真すら殆ど無いまま、ナムチャ・バルワと言う垂涎の玉峰に隠れて不遇をかこってきた。この深いベールに覆われてきたギャラ・ペリをこの世に紹介したのは、1913年にこの地を訪れたF.M.ペイリーであろうか。

ペイリーのその時の記録は、「ヒマラヤの謎の河」として訳出されており、彼はその中でギャラ・ペリを次のように紹介している。

『ミビの下から、その匹敵者ナムチャ・バルワに半ば隠れて見えていた雪のピークは、今、その威容を眼前にあらわした。ギャラ・ペリ7,151mである。この山自体、世界の巨峰であることはもちろんであるが、さらに驚くべきことは、ナムチャ・バルワ7,756m（注：現在は7,782mとされている）との距離は、わずか20.8kmであり、ツァンポー河は両者の間をギャラ・ペリより4,267m下、ナムチャ・バルワより4,877m下を流れていると言う事実であった。……』

いかにこの間を断ち切って流れるツァンポーが深い峡谷を形成しているか想像できよう。

日本ヒマラヤ協会（HAJ）では、以前よりナムチャ・バルワの登山を熱望してきた。然し、これまで同峰は、中国隊が登るまでは外国隊に開放しないと言う方針の元に、中国隊の独壇場として試登が行われてきた。HAJではこれらの状況を

鑑み、先ず、ナムチャ・バルワへの登龍門としてギャラ・ペリに対して登山許可申請を行った。其の後、中国登山協会及び西藏登山協会と継続折衝を重ねた結果、国内の他団体との合同隊による登山許可を取得した。

この許可を得てHAJでは1985年9月～10月にかけて偵察隊（山森欣一隊長他2名）を派遣し、同峰の南西面をつぶさに観察して貴重な写真を持ち帰ってきた。

そして本年、他団体との合同は相手側の都合により中止となり、HAJ単独チームでこの玉峰へ登山隊を派遣することになった。

以下に殆ど太陽を拝むことの出来なかった東チベットでの登山紀行の概要を記す。

2. アプローチ

9月1日、HAJのチョー・ウィ隊（八嶋寛隊長以下10名）、カルジャン隊（新郷信廣隊長以下6名）、ラプチェ・カン偵察隊（斎藤安平隊長以下2名）の3隊と共に日本を出発した当隊は、北京、成都を経て、4日にチベットのラサに入った。成都からのフライトでは、機窓からナムチャ・バルワ、ギャラ・ペリなどの雪嶺が眺められ、心は早くもその白き頂へと飛んだ。

ラサでの4日間の滞在で、隊荷整理や現地購入品の買物など最後の準備を終えた我々は、8日、ラサを出発して林芝県の八一鎮へと向かった。

隊員、連絡官、通訳、連絡官助手を乗せた2台のジープは、ラサ市内を抜け、ラサ大橋を渡ってラサ河左岸の川蔵公路を進む。川蔵公路は殆ど舗装は無く砂利道となり、もうもうと上がる土煙りの中を車は疾走する。

道はやがてラサ河の支流に沿って進むようになり、その源流へと車はどんどん高度を稼いでいく。ラサから約3時間（約150km）でメラ峠（4,870m）を越える。峠周辺の広々とした高原にはノンビリと草を食むヤクの放牧が見られた。土地の人の話によるとこのメラ峠からギャラ・ペリが望見できると言うことであったが、生憎の曇天で眺望は得られなかった。

峠からは一気に白曲（パイ・チュー）の源流へと高度を下げた後、この白曲に沿って道は続く。

東へ進めば進むほどこれが同じチベットかと思うほど緑青々とした肥沃な土地が広がり、豊富な森林が目につく。往き交うトラックはいずれも見事な木材を満載しており、これまでのチベットのイメージとはほど遠い景観である。将にテライの大平原を知らずしてネパールを語れないのと同じで、広大なチベットも、この東チベットを知らないと単に荒涼たる大地として片付けられてしまうことだろう。

白曲に娘曲（クニヤン・チュー）が合わさり、河の名が尼洋曲（ニイヤン・チュー）になると間もなく工布江達県に入る。ここで橋を渡り、八一鎮までは左岸沿に下るようになる。

土煙りで真っ白になり、お尻が悲鳴をあげそうになる頃、八一鎮に到着。八一鎮は農牧学院の宿舎に落ち着く。

この日は、ラサから約400km東へ走行し、高度にして1,240m登って1,880m下ったことになる。やはり、ラサとの高度差約600mの違いは空気が濃いような気がする。

9日、この日はまず米林県の県長を表敬訪問する。今遠征で一番懸念されたのが、ベース・キャンプ（BC）までのトランスポートーションである。100人ものポーターが集まるかどうかが大きな問題であった。そのためにはポーターの所轄県である米林県の協力は是非とも必要で、前もって何度か協力依頼を要請しておいた。

八一鎮から小1時間程で尼洋曲はヤル・ツァンポーに出会う。暫くツァンポー左岸の車道を上流に向かって走り、ツァンポーにかかる大橋を渡る。橋を渡るとキャラバンのスタート地であるべと米林県への道が左右に分かれる。我々はまず右の道を米林県へと向かう。大橋から約30分、気持ちの良い松林の中を車で走り抜け米林県の県庁に到着する。

県庁で党書記兼県長の罗布次仁（ロブ・ツェリン）氏をはじめ公安局長、交通局長などの要人にお会いし、ポーターの件に関して確認する。

「既に100名のポーターは手配済みなので心配はいらない。特に今年は屈強な若者を集めたので問題は無いだろう。」と言われ一安心する。さらに何か問題があるといけなないので米林県公安局の者と

べ区の管理人を目付としてBCまで同行させると言われたただ「多謝」。

米林県を後にべへ向かう。米林からべまでは約100km。然し、途中何度も川を横切るような悪路のため、スピードは上がらず、3時間半ほど要す。

この辺りのツァンポーの河幅は広く、所々に広大な中州が見られる。また、途中にはどのようにして形成されたのか真っ白い巨大な砂山が見られるなど、運ばれてくる土砂量の多さに驚嘆させられる。

べ区の招待所は、5人室のドミトリー。生憎とコックが病気とかで、早速、この日から自炊となる。

翌日は、トラックで搬送した隊荷の整理を行う。この地域でのポーターは、ネパールなどのポーターと違って20kgしか担がないため、梱包が面倒である。また、今回のキャラバンは道が狭く悪いと言うことで、背負いにくい荷物は軽くするかコンパクトにまとめるかしなければならず、マットレスのようなかさばる物など僅か7kgで1個分としなければならなかった。

午後になるとポーター達が三々五々集まってきて、招待所のまわりにはテントが立ち並び、我々はポーター達の見世物となる。

3. ヤル・ツァンポーに沿って

11日、キャラバン開始。

前日から14時間近く降っていた雨も夜明けと共に徐々にあがり、出発する頃には曇天となった。

9時半頃からポーターへの隊荷割り振りを行う。米林の交通局、公安局の人の立会いの元で1人ずつ隊荷と支給装備が手渡される。荷物を受取ったポーターは走るようにして舟渡し場へと急ぐ。

べの招待所から30分ほど下流でツァンポーを左岸に渡る。舟は丸木舟を二つ横につないだ双胴イカダのような簡単なもので、1回で15~18人のポーターが限界のようである。結局、このツァンポーの舟渡しには、7回の往復で4時間半かかり、午後3時前に漸く完了した。

全ポーターが左岸に渡り終えてからキャラバンを開始する。歩きだすとポーター達は道幅いっぱ

いに広がり、まるで競歩のような勢いで歩きだしたのには驚かされた。ティンベ村までの小1時間はまるで競技会のようなありさまで、昨年の偵察隊の報告とは随分違った。これならキャラバン日程は予定以上に進めそうだったのも束の間、ティンベで昼食のため休憩を取った後は、ガックリとペースが落ち、「小止」の連続となり、やはり聞いてた通りの歩みとなる。

ティンベから約1時間半進んだスースン村でキャラバン初日の夜を迎える。夜半から激しい雨に見舞われ初日からみじめな夜となる。

12日、視界が全く閉ざされ、シトシトと雨降る中を出発。スースンからターリンまでは、広い平坦な道を辿る。途中、対岸にキールカルの村を見たが、その背後に聳える筈のナムチャ・バルワの雄姿は望めず、僅かに下部の雪壁が雲間に眺められただけであった。

ターリンを過ぎると道は狭くなり、うっそうとした竹林の中をどんどん高度を下げ、ツァンポーの河原へと下る。水車小舎のある枝沢の橋を渡り、河沿の道を暫く辿るとチュベに着く。村と言っても人家は一軒だけで、この人家がツァンポー左岸では最奥の人家のようである。この日は、人家の外れにある気持ちの良い草原にキャンプをする。

13日、チュベを過ぎると道は益々悪くなり、全員ナタを片手に藪払いをしながらの行軍となる。この日は、朝から雨降る中を出発し、一日中陽の光を見ることもなくズブ濡れとなって藪との格闘を強いられた。

チュベから3時間程進んだ所に水場があり、杉の巨木の下で雨宿りをしながら昼食を取る。どんなに雨降る中でもポーター達は、松ヤニのたきぎを拾ってきては、それに火打石で上手に火をつけてしまう。雨季の間は、焚木が燃えにくいせいか皮で作ったふいごを持参して火をおこしていたのも珍しかった。帰路のキャラバンでは見られなかったのもあれも雨季における生活の知恵なのであろう。

昼食後の2時間も雑木の多い辛い行進を強いられ、漸くギャラ村の対岸に出る。この日は、ギャラ村対岸の舟渡し場の上でキャンプする。キャンプ・サイトとしては狭すぎてテントも満足に張れ

なかった。

4. ギャラ・ゴンパの伝説

14日、この日は約3時間半の行進で、昼食地がそのまま幕営地となってしまった。先に適当なキャンプ地が無いと言うことで已むを得なかったが、それにしても余りにも短い行程であった。

幕営地から対岸沿の道を辿ると直ぐにギャラ・ゴンパの跡地に出る。ベイリーのヒマラヤの謎の河にもでてくるこのゴンパも、今はただタルチョーのなびくマニ塚が残っているだけである。

地元の人の話によると、このマニ塚の背後を流れる激流の中には鎖でつながれたアシャン・チュ・ゼエ（注：1）の神像が安置されていると言う。この神は人が死んだ時、その人を天国にやるか地獄へやるかを決める神である。チベットの人は、このアシャン・チュ・ゼエの神像のあるギャラ・ゴンパを生きているうちに必ず一回はお参りして極楽浄土の来世を願ったと言われる。そして、ここを訪れた時、この滝の中に「赤い色」のアシャン・チュ・ゼエの神具を見ることが出来た人は、幸運で長生き出来ると言われ、「白い色」のそれを見ることが出来た人は、運が普通の人。

「黒い色」のそれを見た人は、凶運で人によっては直ぐ死ぬことがあると言う。然し、実際にはこの色を見ることは希れのである。

ゴンパの裏手に続く山は、五台山と称されギャラ・ゴンパを訪れた巡礼者は、この山も一緒に参拝したと言う。

ギャラ・ゴンパの跡地を過ぎると道は徐々に河岸から離れてツァンポーへ張り出した尾根の先端を高捲くようになる。尾根の反対側に入るとうっそうとした竹林となり、暫くして道が下るようになると程無く小さな沢が出会う。この沢を渡った草地でランチ・タイムとなる。そして前述の通り、この日はそのままこの草地で幕営となる。

この日初めてギャラ・ペリの南稜末端の岩壁部を垣間見ることが出来た。

15日、前夜の話によると今回のポーターは5日分の食糧しか持参しておらず、この日1日の行動で帰ると言う。どうも、昨年の偵察隊のベース・ホーム（B・H）までのつもりで来たようである。

兎も角、この日中に何としてもB・Cまで運んで貰わないと大変なことになるので、この日は朝食を取ると直ぐ尾形以下3名が先行した。

途中、露岩の所に6m程フィックスを張り、前日同様ナタで藪を払いながら小1時間も進むと眼下にギャラ・ペリ川が俯瞰出来る展望台に出る。晴れていればギャラ・ペリの雄姿が望められるのであろうが、相変わらず山は濃霧の中である。この展望台には古いマニ塚があり、このマニ塚の横を通過してギャラ・ペリ川右岸沿の道をトラバース気味に辿る。ナタ目、赤布を探しながら雑木の多くなった踏跡を辿っているうち速いポーターに追いつかれてしまう。

幕営地から約2時間半でギャラ・ペリ川河原の昨年のB・H跡に到着する。早々に着いたポーター達は荷物を置いて休みはじめたので、隊員はB・Cを目指して先行する。

河原から枝沢に沿って5分程登ってから急登に取り付き、一気に高度を稼ぐ。丁度、道はギャラ・ペリ川のゴルジュ帯を高捲くようにつけられている。

やがて、道はシダ類の密生する大草原、“センダンの広場”に出る。ここにも昔はゴンパがあったそうだが大地震で崩壊してしまったとのこと。今はただ広場の直ん中にある繁みの中にタルチョーが一本寂しくはたためている。センダンの広場の手前の竹林に転っていた銅製の鍋などもゴンパの名残りなのであろう。

この広場で昼食を取っていると、早く着いたポーターは、早速、小屋がけを始め、ここに泊まる素振りをみせる。ここに荷物を集結されては一大事と、昼食もそこそこに先を急ぐことにする。

赤布、ナタ目を探しながら獣道のような踏跡を辿って行くと、所々に大きな獣の足跡や糞があって気味悪くなる。大きな声を上げたり、ザックにつけた鈴を鳴したりして進む。(後日談になるが、我々が登山活動に入っている時、B・Cへ熊とタヌキが招かざる客として訪れた。)

この日は、もうポーターは動かないと思い、途中にザックをデポしてルートを切り開いて行くと、14時の交信でポーターは自分達の荷物をセンダンの広場に置いて隊荷のみを担いで先まで運ぶ

との連絡が入る。それではと、夢中でルートを探していくも途中でルートを見失い、2～3mもあるトゲの木の密生した林の中で右往左往する。その内、昼食を終えたポーターが追いついてきて混乱をきたしはじめたので、已む無く下の河原へ隊荷を集結することにして河原へ降りる。

5. 日中友誼橋

それにしてもセンダンプー側から流れてくる激流はもの凄く、とても渡渉で渡れるような流れではなかった。一度、流れの中にある大岩から対岸へ飛び移り、ザイルを張って渡渉してみたが危くおぼれそうになった。

当初の予定では、この流れを渡り、対岸に押し出しているインゼル状のモレーン台地上にB・Cを設けるつもりであった。然し、この激流を前にポーターはここまで諦めざるをえなかった。

ポーター1人1人にボラロイド写真を撮ってやってお別れする。

ポーターが帰った後、暗くなるまで河原の整地に追われ、どうにか4張のテントを設営する。

こうして我々は、5日間にわたる悪絶困難なキャラバンを経て、漸くギャラ・ペリ氷河舌端のインゼル下部まで辿り着いた。各隊員の手はトゲだらけとなり、熊のような手が今キャラバンの苦労を物語っていた。

翌朝、この日はなんとしてもこの激流に橋をかけなければと、架橋の段取りを話していたら、ポーターが丸太を担いでやって来た。ペのポーター9名が自発的に橋かけのために残ってくれたと言う。その好意には隊員一同ただただ、感謝。米林県公安局のツェリン・ドルジェ氏、ペ区の管理人、ソラン・ドルジェ氏の両氏と9名のポーターの協力により、小1時間ほどでとても立派な橋が出来上った。この“日中友誼橋”の完成で、橋かけの大仕事が一掃したので、この日は早速、インゼル上部へのルート作りに出かける。

去年は、インゼルの右端にルートを取ったようであるが、今年はモレーンの崩壊が激しくルートにならなかった。我々は獣道を利用してインゼルの直上するルートを切り開いた。約2時間程かかってインゼルの頭まで道をつけ、トゲの木の密

生から解放されると目の前にはモレーン・カバーされたギャラ・ペリ氷河が現われた。荒れた氷河を挟んで対岸（左岸）にB・C予定地が眺められる。ポーターに帰られてしまった状況下で、隊員だけであそこまで隊荷を運び上げることは時間的に無理であった。

この日の偵察結果からB・Cは、前日の河原にするほかないと判断して、連絡官の王さんに了解を求める。はじめは激流が気になってか難色を示したが、登山活動の日数の件やテントを山側の高台に設営することなどを話したら了解してくれた。B・C決定となり、午後はメス・テントの設営などB・C作りに汗を流す。

B・Cの高度は3,200mと、当初の予定よりも約300m程低くなり、頂上までの高度差が約4,000mにも及ぶことになった。

6. 登山開始とルート変更

2日間、隊荷整理などでB・Cに滞在した後、順応訓練を兼ねてA・BCの偵察に向かう。

インゼルの頭からギャラ・ペリ氷河を横切って対岸に移り、左岸に走る長大なモレーン稜に取り付く。このモレーン稜はかなり古いものらしく、山側はすっかり草で覆われている。我々のA・BCはこのモレーン稜をドン詰りまで登りつめて4,200mの地点に設けることにした。ほぼ予定通りの位置である。

この2日間の順化トレックを終えて、22日からA・BCへの荷揚げを開始した。B・CからA・BCまでは、約20kgの負荷で2～3時間の行程である。高度差は大きいものの高度が低いので楽である。A・BC下のアブレーションバレーは、森林帯となっており、緑青々とした景観が眼を休めてくれる。

A・BCへの荷揚げがほぼ完了した後、26日から上部の登山活動に入った。

当初の計画では、西壁の頂上より突き上げる顕著な岩稜にルートを予定していた。然し、ルート工作の初日からA隊（尾形、太田）が、氷河内で2発の雪崩に襲われる一幕などもあって、このルートでは早々に諦める。ともかく、西壁内は一度雪が降ると雪崩のオンパレードとなり、とても

恐ろしくて近づけなかった。因に10月12日の深夜に発生した大雪崩は物凄く、その爆風によってA・BCのテントが100m以上も下方へ吹き飛ばされるほどであった。幸い誰もいなかったために重大事故だけは免がれた。

結局、ルートは第2案であった西壁の右端を縁どる長い岩稜に取ることになった。

27日、A隊はA・BC裏手のガリーから岩稜に上がって4,740m地点まで登りルートの見通しをつけた。

ルートは、急峻なガリーを7ピッチ登るとスラブ状の奥壁にぶつかり、この基部を2ピッチ半右へトラバースすると10m程の岩場が立ちはだかる。この岩場を「スフィンクス岩」と名付けた。この右手には井戸底を思わせるような深く暗いガリーが喰い込んでおり高度感がある。これを越えるとその上で右から支稜が合わさってきて稜は広い雪面となってくる。さらに左の尾根筋に沿ってどんどん高度を稼いでいくと広いスノー台地（4,600m）に飛び出す。これを横切ると再び稜は痩せてきてナイフ・エッジとなる。途中、3ピッチ程は、蟻の刃渡りのようなナイフ・エッジで緊張させられる。

30日、蟻の刃渡りの上の細い雪稜を削ってC1（5,000m）予定地とする。

10月3日、休養明けのA隊によってC1が建設され、翌日からC2へのルート工作にかかる。

7. C・2へのルート

4日、前夕からの大雪で、この日は出だしから胸、腰を没する深いラッセを強いられる。前回の最高到達点から雪稜を1ピッチ登って、さらにいやったらしい岩稜に4ピッチ、フィックスを延ばすと稜上にピナクルが立ちはだかる。アブミを持参しなかったため、この日は、この基部で打ち切りとなる。

翌日、このピナクル越の荷揚げでは大変なアルバイトになると思い、右手のルンゼ側にエスケープ・ルートを探す。ピナクルの2ピッチ手前から雪壁をルンゼ側へ10m程懸垂で下ると、側壁に急峻ながらも断続的に雪のバンドが続いており、ここにルートを取ってみる。「洞穴バンド」と名付け

たこのスノー・バンドを3ピッチ登ると、前日立ちはだかったピナクルの上に出れた。再び稜上に戻り、さらに1ピッチ、フィックスを延ばすと、“門”のようなピナクルにぶつかる。この“門”の上は、“ノミの刃渡り”とでも言えそうなナイフ・エッジとなっており、馬乗りになって2～3m程進んでみたが余りにも不安定なため、ギブ・アップする。結局、このピナクルも基部から左手のスラブを10m程懸垂で下り、不安定な雪壁を登り返してエスケープする。スラブの上に積った雪壁を騙し騙し2ピッチ登ると漸く安定した雪稜となる。

6日、空間と雪面の境界が分からないような相変わらずの悪天の中、雪稜上に8本のフィックス・ロープを施して、ブラック・ジャンダルム上のナイフ・リッジに飛び出した。

7日、前日の最高到達点から尻の切れそうな雪稜を4ピッチ辿ると、スノー・ドーム取り付けの急峻な雪壁となる。丁度、シマウマ模様の岩壁が露出していることから、ここを“ゼブラ岩”と呼んだ。この“ゼブラ岩”は、スラブの上に積った60°～70°位の雪壁で、不安定な積雪に最も神経を使う登攀を強いられた。この日は、“ゼブラ岩”を登り切った所で吹雪となり、ルート工作进行を打ち切る。

8日からB隊（橋本、今村）が上部ルート工作に向かう。B隊は、9日、10日の両日で、“ゼブラ岩”上部のナイフ・エッジに5本のフィックス・ロープを施してスノー・ドームへと抜け出した。

11日、この日は、前日からの大雪で深いラッセルに苦しめられたが、B隊、C隊（飛田、藤原）の手によって夕方遅くC・2（5,650m）が建設され、B隊がC・2に入った。

8. 待望の南稜へ

12日、この日C・2からルート工作に向かったB隊は、高度約5,800mの地点で待望の南稜上に飛び出す。

C・2まで上がると稜線は幅広くなり、フィックス・ロープも不要になる。C・2の背後に聳えるスノー・ピッチは直下の雪壁に2本のフィックス・ロープを施す。このピークの上でルートは、

ほぼ直角に左へ折れ、その先で一旦コルへ下ってから南稜に突き上げる。

西壁右氷河（仮称）の突き上げるこのコルの所は約3ピッチのナイフ・エッジとなり、いつも強風が吹き荒れていた。また、コルの反対側は、足元から一気に3,000mも切れ落ちて、ヤル・ツァンポーの流れが真下に俯瞰できる。晴天の日は、対岸のナムチャ・バルワはもとより、麓のペマコウチュンや大湾曲部を取り巻く重畳とした山々が眺められた。

南稜上に出るとルートは、それまでの痩せた稜線とは対称的に幅広い雪壁となって頂上まで急峻に迫るようになり、新たな障害として幾重にも重なる巨大な氷崖やクレバスが行手に立ちはかかるようになる。

13日、この日、休養のためA・BCへ下った橋本、藤原より前述した雪崩事故の様子が各キャンプに伝えられ、取り敢えずかろうじて残ったテントを山側へ移動することになる。気の毒ながら彼らの翌日の休養はテント場整地の土方作業となる。

一方、上部ルート工作の方は、漸く南稜上に出たものの悪天候が続き、なかなかルートは延びなかった。ナイフ・エッジと違って広大な雪壁の中では、適当な間隔で赤旗を立てておいてもひと度悪天に見舞われるとホワイト・アウトの状態になってしまいルート・ファンディングに難儀させられた。

9. 漸く太陽の恵みが

10月も16日になって漸く好天の兆が見えはじめ、雲間に青空が見られるようになった。

この日、A隊は前日の最高到達点に約3時間で到達した後、上部のルート工作にかかった。当初、ルートは、右の雪壁へまわりこむ予定でいたが、濃霧が晴れてみると稜上に立ちはだかるハンギングした氷崖も弱点がありそうに思われたので、取り敢えず稜通しに進む。上部からのチリ雪崩の堆積のため、胸まで没する深いラッセルを強いられ、漸くこの氷崖に取りついたが、右も左もクレバスが大きく口を開いていてどちらも登れなかった。已む無く一旦戻ってこの氷崖の基部を右の雪壁へ

まくことにする。稜から最初の100mは、首まで潜ってもまだ足場が定らないような深いラッセルで、その後、急峻な雪壁に2本のフィックス・ロープを延してこの日は打ち切りとなる。

17日、この日からA隊に橋本が加わり3人でルート工作に向かう。前日の最高到達点から20m程でまた氷崖にぶつかる。頭上にはシャンデリアのような氷柱が垂れ下がり、脅かされる。後日、この“ギロチンのトラバース”と呼んだ所は、氷柱の大崩壊が起こり、下の雪壁は中の氷の層まで洗われてしまった。

この氷崖の基部を右にまわりこんでから再び稜上に上がったが、クレバスに阻まれて前進できず、また、右の雪壁へ大きくトラバースする。大きく口を開けたクレバスが直横に走り、なかなか越えられず100m程直横にトラバースさせられる。結局、この日はここまでで時間切れとなる。

翌日、ここから広大な雪面を右上し、斜面が急になる辺りからフィックス・ロープを施す。2ピッチ登った所で氷崖のくびれた部分を越え、さらに半ピッチ程登ると適当なキャンプ地が見つかる。早速、この地をC・3予定地としてテントを1張設営する。ここは、正面にナムチャ・バルワのどっしりとした山塊が座り、眼下にはツァンポーの流れが銀色の帯のように俯瞰できる最高のキャンプ・サイトであった。

19日、C隊（飛田、今村、藤原）のサポートを受けてC・3（6,300m）が建設され、尾形、太田、橋本がこの日C・3に入る。

翌日、C・3の3名は、素晴らしい御来光を拝んでからC・4のルート工作に向かった。

C・3背後の台地に上がると氷崖崩壊の爪跡、デブリの壘々とする雪原が広がる。これより氷崖の右手のくびれたところを目指して登っていく。途中、大きなクレバスが横たわり、その上から傾斜が急峻になってくる。この雪壁に4本のフィックス・ロープを施し、フィックスの終点より直ぐ上の氷崖を越えると頂上は一段と大きくなって目前に迫る。フィックス・ロープの節約のため、その上の雪面は赤旗だけを立てていく。約200m程登ってから氷崖と氷崖の間にルートを求め、激しいスノー・シャワーの中を最後のフィックス・ロー

プを張る。アンカー・ポイントはスノーバーが無くなったのでアイス・パイルを打ち込む。然し、ここまで登るとこれ以上の前進を阻むかのように激しいブリザードが降り狂い、立ってられない状態となった。手足はチリチリと痛み、髪、ヒゲはつららで真っ白となり、長居は無用とばかりに下降に入り、C・2まで一気に下る。

21日、C・3を出発した飛田、今村、藤原の3名は、前日の最高到達点からさらに6ミリの補助ロープを50m程延ばして、C・4（6,700m）を建設する。

こうして漸くアタック態勢が出来上がり、我々は順次B・Cへ下って最後の休養を取った。

10. アタック

高度3,200mでの休養は、本当によく休まる。3日間の休養で、リ・フレッシュした我々は、25日からアタックに向けての行動を開始した。

先ず、第1次隊として尾形、橋本、今村が25日B・Cを出発して一気にC・1入りする。翌日から順次キャンプを進め、28日にC・4入りした。

一週間振りに上がったC・4は、テントが見るも無惨に潰されており啞然とさせられる。一時は雪洞を掘ってのピバークかと思ったが、良く調べてみると、ポールが折れて張綱が切られているだけで布地は破れていなかったの補修して張りなおす。折れたポールは、予備ポールが無いので赤旗の竹で代用する。

テントの補修を橋本に頼み、尾形、今村は上部のルート工作に向かう。C・4から直ぐの所にこれまた大きな氷崖が横たわっており、これを右から攻める。氷崖の中段を右へ約15m程カッティングしながら水平にトラバースした後、直上してここを抜ける。さらに、氷崖の上を左へ50m程トラバースすると稜上に出る。目の前にはセンゲンブーが大きく現われ、ギャラ・ペリの頂は指呼の間に見える。去来する上層雲に一抹の不安を抱きながらC・4へ戻り翌日のアタックに備える。

雪崩事故によってC・4で使用予定のテントが吹き飛ばされたため、C・4には2人用の軽量テントが配置された。2人用に3人と言うことではじめから窮屈が予想されたところにきてポールが

破損したため、最悪の居住性となり、まんじりとし
ないアタック前夜を迎えることになった。

29日、第1次隊の3名は、その居住性の悪さか
ら1時半に起床し、4時50分にC・4を出発する。
ヘッド・ランプの明りを頼りに前日の最高到達点
へと登り、さらに稜通しに進む。50分程登った所
でクレバスにぶつかり、どちらにルートを取って
良いのか分からず、明るくなるまでツェルトを
被って待機することにする。-24℃の寒気はオー
バー・シューズを通して容赦なく浸透し、両足は
チリチリと痛む。約1時間半程の待機であったが
ひどく長く感じられた。7時過ぎに漸く明るく
なってきたので出発する。明るくなっても天候の
方は前日までの好天とは大違いで風雪が行く手を
阻む。

雪面の傾斜は登るにしたがって立ってきてどう
してもフィックス・ロープを施すようになる。何
もかもバリバリに凍てついた中でのルート工作は
辛く、ペースも遅々として上がらない。

11時の時点で高度計の針は、まだ6,850m(6,980
m位の高度か?)であった。この時点でこの日の
登頂は諦め、さらに50mフィックス・ロープを延
ばして下山にかかった。

C・4で第2次隊に翌日のアタックを託し、1
次隊はそのままC・3まで下った。

30日、2次隊の飛田、太田、藤原の3名は、1
次隊の結果から、この日は明るくなるのを待って
7時10分にC・4を出発する。然し、前日同様の
悪天のためにペースが上らず、前日の最高到達
点に着いた時は既に11時になっていた。結局、2
次隊も登頂を断念して下山にかかった。C・3で
待機中の1次隊に再度のアタックを託して、2次
隊はC・2まで下る。

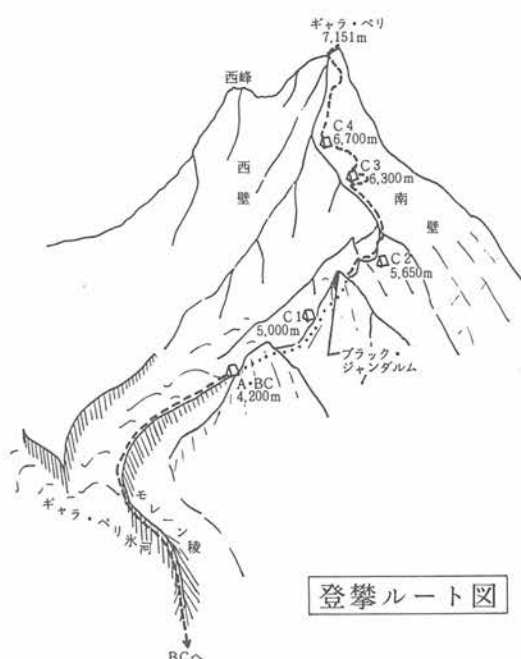
11. 烈風の白き頂へ

1次隊、2次隊と相次いで敗退した後、再び尾
形、橋本、今村の3名にアタックが託された。

31日、重苦しいプレッシャーにさいなまれ、
殆ど眠れぬまま3時半に起き出す。時折り風の吃
哮が TENT を打つも、天候の方はますますのよう
である。

6時出発の予定が15分遅れで出発となる。一応

▼ギャラ・ベリ登攀図



6時出発、15時登頂、19時帰幕の予定でアタック
することにしていた。

夜明け前の闇夜に新月が淡く光る中をヘッドラ
ンプの明りを頼りに登る。C・3上部の雪壁の中
程で御来光を拝む。明るくなるにつれ素晴らしい
雲海が広がり、雲上に浮かぶものは約6,000m以上
の山ばかりのようであった。

C・4にはほぼ予定通りの2時間15分で到達す
る。ここでスノーバーを2本回収して持参する。

C・4から上もますますのペースで進み、前回
の最高到達点には予定より少し早く、11時前に着
いた。何がなんでもの思いが先を急がせる。途中
で回収して持参したP・Pロープ(8mm)とナイ
ロン補助ロープ(6mm)を合わせて約100mを急
峻な雪壁にフィックスする。その上にも急峻な雪
壁が続きフィックス・ロープのほしいところで
あったが、全て使いきってしまったため、ノー・
ザイルでそのまま雪壁を直上する。積雪は大腿部
まで潜り、深いラッセルにアルバイトを強いられ
る。頂上岩壁は直ぐ手の届きそうな所に見えるも
なかなか近づかず、時間だけが過ぎていく。

フィックス・ロープの終了点からさらに200m程

雪壁を直上して漸く頂上岩壁の基部に到達した。時間は、丁度15時。予定では登頂の時間である。然し、ここから見る頂上は直ぐそこであり、迷わず前進する。然し、直ぐ近くに見えた頂上稜線もここから3ピッチもあり、思いのほか時間がかかった。

懸念された頂上直下のクレバス帯も、予想通り右端の岩壁よりに難無く越えることが出来た。然し、その上もクレバスが錯綜しており神経を使わされる。最後のツメは、コルへ直上するか、左へトラバースしてから頂上稜線に出るかの二者選択にせまれたが、ルートの長さでクレバスを考えて、より急峻ながらも前者のルートを取ることにする。

井戸の底のようなクローワールの基部からダブルアックスで逆くの字状の氷壁を登り、中段から左へ2m程トラバースした後、シュカブラの塊りのような不安定な雪壁を乗越してコルに飛び出す。よもや、頂上直下でこれほどアクロバティックな登攀を強いられるとは思わなかった。

頂上稜線に出ると雲間に西峰の怪峰が眺められ、稜線上には大きなクレバスが口を開けていた。

コルからさらに稜線上に立ちはだかる10m位のシュカブラで覆われた雪壁を登るとその上は平坦な稜線となり、ほどなく頂上であった。C・3から約11時間の苦闘の末、漸く16時55分にギャラ・ペリの白い頂は、我々の足元となった。

ゴーゴーと唸る強風と去来する暗雲に、初登頂の感激や頂上からの眺望を味わうこともなく、手早く頂上での儀式を終えて逃げるように下山にかかった。頂上での気持ちは、初登頂の感激よりも、あのノー・ザイルで登ってきた約200mの雪壁のトレールがこの風雪で吹き消されたらどうしようと言う心配であり、C・3への無事帰幕のことばかりであった。

17時15分、頂上を後にする。コル直下のクローワールは、50mのメイン・ザイルを記念品としてフィックスして懸垂で下る。これで全てのロープ、スノーバーを使いきってしまった。その下2ピッチの雪壁はクレバスに注意しながら山側を向いて慎重に下る。

頂上岩壁下の雪壁は、案の定トレールが吹き消

されていた。それでもかすかな痕跡を探しながら進み、奇跡的に往路に立てた赤旗を見つけた。

往路のトレールは全て吹き消され、この赤旗から下7ピッチは深いラッセルを強いられる。このラッセルに加えて間断無く降る雪と視界の悪さで帰路は難儀を極めた。

それでもどうにかC・4には19時20分に到着。最後の一光が沈む寸前であった。あっと言う間に小雪舞う闇夜につつまれてしまい、その中をヘッドランプをつけてC・3へと下る。

C・3背後のデブリの壘々とする雪原に入った頃よりルートを見失いルート・ファンディングに難儀する。しんと降り雪がヘッドランプの僅かな明りの邪魔をし、地形を分からなくする。時間が時間だけに気がもめるがなかなかみつからない。暫くして一本の赤旗がヘッドランプの光の中に入った。これで漸く自分達の進む方向が判明した。

こうして我々は、21時5分にC・3を見つけ出し風雪の彷徨から脱出できた。実に15時間に及ぶアタックで、長い1日であった。

12. エピローグ

こうして我々は、10月31日と言う遅い日にどうにかギャラ・ペリの頂を踏ませて貰うことが出来た。それは、将に今回の登山の苦闘を象徴するかのようなギリギリの登頂であった。

11月1日、冬風の冷たく感じられる中を、上部キャンプを撤収しながらB・Cへと下って、長かった登山の幕は降された。

最後にギャラ・ペリの高度についてふれておきたい。

現在公表されている同峰の高度は7,151mであるが、実際にはもう少し高いような気がする。と言うのは、我々は今回トーマン高度計を3台持参した。そして各高度計をラサ・ホテルの高度3,650mを基準として高度計の目盛りをセットし、それ以後調整を行わず、各地点で高度計の示度を記録した。10月31日の登頂の際、頂上での高度計の示度は7,150mであった。この数字を見る限りにおいては、公式高度とほぼ同じ値な訳だが、これまでの経験から、この種の高度計は基準点より高所に

上がれば上がるほど示度は実際よりも低い値を示すことが知られており、このことから考えると示

度が7,150mと言うのは、実際の高度はもう少し高く、7,200～7,300mはありそうに思えるのである。

(III) ギャラ・ペリの気象

尾形好雄

私は1985年の秋、ブータン・ヒマラヤのガンケル・プンスム(7,541m)の遠征に出かけた。先発隊として8月15日にブータンの首都ティンブーを出発して8月28日にBCを建設したのだが、この時期のギャラバンは、モンスーンのさ中と言うこともあって、殆ど連日雨に見舞われる散々なものであった。本格的な登山活動は9月2日から開始したのであるが、9月一杯はモンスーンの影響で悪天候に悩まされた。ポスト・モンスーンの好天期間が訪れたのは10月1日になってからである。

今回、ギャラ・ペリ遠征の参加が決まった時、先ず浮かんだのがこのガンケル遠征時の天候であった。ガンケルよりもさらに東に位置するギャラ・ペリはガンケル以上の悪天候なのであろうとそれなりの覚悟をして出かけたのだが、まさに聞きしに勝る悪天候のエリアであった。今回のギャラ・ペリの気象は'85年のガンケルに比べて、なお悪い天候であったと言えるのは確かだ。

9月11日にペを出発してBCへのギャラバンを開始したが、BCまでの5日間は連日雨に見舞われた。それでも高度が低いだけ同じ雨でもガンケルよりは楽であった。

9月16日のBC建設から10月15日までの1カ月間で青天らしい青天に見舞われたのは、僅か2日間だけ。雨も雪も降らなかった日はこの2日間の青天を含めて4日しかなく、残りの25日間は殆ど陽の恵みを受けることはなかった。

また、この1カ月間の気象パターンを見てみると、9月25日、10月3日、10月10日の夜にいずれも大雪に見舞われており、大体1週間周期で大きく崩れるパターンがみられた。

今回はBCの高度が3,200mと低かったこともあって雨と雪の境目は大体ABCの高度で4,000m～4,200m位であった。ただ、10月上旬を過ぎると気温も下がってきて、10月10日の大雪の時は3,300m付近まで真っ白になった。

この地に漸く秋の好天の兆が見られたのは10月16日になってからである。そして翌、17から28日まではまさにモンスーン明けのような素晴らしい好天期間が訪れた。この好天期間こそこの地における絶好のアタック・チャンスであろう。我々は1日違いでこの好天を逃してしまい苦労を強いられるハメになった。

'85年のHAJ偵察隊及び同時期にペマコウチュンまで入った大分岳連踏査隊の報告によれば'85年は10月2日頃よりこの秋の好天期間が訪れたと言われる。'86年は前年に比べて2週間程遅れたようである。最も、これは東チベットのこの辺りだけではなく雲南、貴州などでもモンスーン明けが2週間程遅れたとかで、あの常春のような気候温暖で知られる雲貴高原でさえ9月は例年がない天候不順であったことが伝えられた。

秋の好天到来と共に気温も下がり出し、ABCの最低気温もマイナスを示すようになった。また、南稜上には雪煙が舞い上がり、ルート工作では目もあけられないようなブリザードに見舞われるなど悪天の後には風と寒気が新たに行手を邪魔だてするようになった。

風の問題については、ナムチャ・バルワの中国登山隊からも報告されているが、これはやはり大ゴルジュと言う地形的な影響で生ずるのであろうか。ギャラ・ペリの場合、大体C2直下辺りからヤル・ツァンポーの流れが俯瞰出来るようになると風に苦しめられる。とくに今回のルートでは、右氷河の源頭部付近が西壁からの風の通り路になっていたこともあって強風が吹き荒れていた。最もひどい日にはフィックス・ロープが縄飛びの縄のように宙に舞い上げられてユマールをセッティングするのに苦労したこともあった。

また、西壁の上端を縁どる南稜上には巨大な氷崖がシュカブラのお化けのような鎧をまとってモンスターに如く立ちはだかっているが、あれも風

によって生成されたものなのであろう。

登山期間中の気温については別表の通りである。10月上旬までは悪天候ながらも気温は高くゼブラ岩までのルート工作は軍手にオーバーミトンで十分であった。登山期間中の最低気温も10月末になって漸く-22℃程度であるからそれほどの低温では無かった。但し、これに風が加わるため体感温度の方はかなり下がる。

ナムチャ・バルワやギャラ・ペリはヒマラヤ山脈と横断山脈の接合地帯にあたり、ヤル・ツァンポーの流れは、ここで大屈曲部をなして流れを急に南へ向きを変え、インド洋に注いでいる。このためインド洋の湿った空気がヤル・ツァンポーの溪谷に沿って北上して大屈曲部に流入し、この地域の気候を温暖・湿潤で雨や雪の多いものにしていと言われている。

土地の人に言わせると5月から9月末までは雨季で、時には10月まで長びくこともあると云う。雨季の間は殆ど毎日雨か雪が降り、雲は厚く、ナムチャ・バルワの雄姿は殆ど見ることが出来ないとされる。11月～12月にかけては寒くなるが好天の日が多くなり、山も良く見られるとのことであった。

この山塊の登山時期としていつがベターなのか一度の経験で言及することはおこがましいが、秋でも今回のようにモンスーン下の悪天時期に6,000m位までルートを延ばし、身体を高度順化させておき、好天到来したが一気呵成にアタックするようにすれば十分勝算はあるように思われる。因に今遠征では悪天による気象停滞は1日も無く、全天候型の行動であった。湿潤で腐った雪もうまく利用してルートを延ばすことが出来る。

但し、ナムチャ・バルワの場合は更に一考を要するように思われる。

ギャラ・ペリ登山隊員名簿

◎ 偵察隊 (1985年9月10日～10月24日)

隊長	山 森 欣 一 (41歳)
隊 員	三 浦 敏 弘 (32歳)
連絡官	ラ バ (拉巴) (51歳) チベット族
通 訳	梁 永 林 (22歳) 漢族
コ ッ ク	バサン (巴桑) (24歳) チベット族

◎ 本 隊 (1986年9月1日～11月21日)

隊長	飛 田 和 夫 (40歳)
登攀隊長	尾 形 好 雄 (38歳) 初登頂者
隊 員	太 田 健 (32歳)
〃	橋 本 康 弘 (32歳) 初登頂者
〃	今 村 裕 隆 (27歳) 〃
〃	藤 原 拓 夫 (30歳)
連絡官	王 家 瑞 (46歳) 漢族
通 訳	崔 昌 燮 (26歳) 〃
助 手	朱 飛 (22歳) 〃

(IV) ヤル・ツァンポー西、東

山 森 欣 一

はじめに

HAJのヌン峰遠征から帰国して間もない1975年12月に、私は一つの夢を所属していた山嶺登高会々報に寄稿した。「うつつの夢」と題した内容は、「国際情勢を考えれば、それは全く不可能なことであるが……」とことわりをつけたが、骨子はチベットの山と川を結ぶ計画であった。

ナムナニ（グルマングータ）を登り、ヤル・ツァンポーを舟で下り、ナムチャ・バルワを登り、更にヤル・ツァンポーからブラマプトラと名の変わる川をインド平原を舟で下ってベンガル湾へ至るものであった。

当時としては未踏であったこの二つの7,700mの巨峰と、謎の河ヤル・ツァンポーを結ぶ、私にとっては心躍るアドベンチャーであった。勿論その中にギャラ・ペリがあったことはいうまでもないことである。

1975年といえば、日本が中国と国交を正常化して3年しかたっていない、中国領ヒマラヤで日本人が活動できるはずもなかった。それが冒頭の「国際情勢……」となったのである。

だが、中国では1976年にそれまで指導者として君臨してきた、周恩来、朱徳、毛沢東が相次いで黄泉の人となり、それ以後4人組の逮捕があり、文化大革命10年のもたらした混乱と破壊から立ち直るため、鄧小平を中心として急速に「四つの現代化」が促進されることとなった。その中には「国の対外開放」も含まれており、遂に待望の中国領ヒマラヤのオープンが実現したのである。1979年春のことであった。

2. HAJの中国

私はその頃、カンチェンジュンガ大縦走の夢にとりつかれており、中国へ具体的に目を向けることはできなかった。その間、中国ではチョモランマ(1980年)、コングルー(1981年)、チョゴリ(1982年)と大物が登られ、ミニヤ・コンカの日本隊二

つの遭難などもあり、相変わらずの狂騒曲が鳴り響いていた。カンチェンジュンガが終了後、私はHAJ事務局に専従することとなり、活動の舞台は必然的にHAJとなったのである。

HAJがようやく中国に目を転じたのは、カンチェンジュンガが一段落した1982年秋であった。中国に対する主眼は定まっていた。それは「未踏」への根張り強い挑戦であり、垂直と水平の未踏への挑戦の中心として、ナムチャ・バルワが据えられたのは当然であった。

HAJの目指す未踏を十分になえてくれる広大なフィールドが中国にはあった。黄河、長江、ヤル・ツァンポーに代表される大河、チャンタンや四川の高原、崑崙や横断山脈、グレート・ヒマラヤの峰々、そしてそれらを結ぶ、川蔵、雲蔵、新蔵、青蔵公路。永遠の聖地カイラス、マナサロワール湖。また、インド、ネパール、ブータンなど隣接する国々のチベット系文化圏。

第一期の計画として、西南中国とインド、ブータンを含んだ「中国及び周辺地域総合探査計画」がまとめられ、当面3年間で10のプロジェクトを展開し、合わせて随時、中国隊ナムチャ・バルワ峰登頂への協力、支援活動を開始することとなった。10のプロジェクト内容は、中国6、インド2、ブータン2であった。

ほぼ当初計画どおり遂行できたのは、それぞれ未踏への熱き想いを抱き続けているHAJの面々なればこそと思われる。

なお、このプロジェクトとは別に、1985年には、秘峰クラウン、崑崙慕士山、黄河源流、青蔵公路からネパールに隊を派遣し、1986年には四川省横断山脈岷山山脈の主峰雪宝頂、チベットのチョー・アウイ、カルジャン、ラブチェ・カンに隊を派遣して、大河、砂漠、森林、高原と、中国のフィールドの持つ未踏へ足跡を残させたのであった。そしてこれらは、その都度会報「ヒマラヤ」誌上で報告され、会員の新たな未踏への憧れを醸成しているのである。

3. ヤル・ツァンポーの西へ

冒頭に述べた私の夢は、現実味を帯びはじめたのである。しかし、ここで大きな暗礁に乗り上げた。それは1983年秋に胡耀邦総書記が来日したことに始まった。ナムナニ（グルラマンダータ）の許可が京都大学、同志社大学の京都勢に中国登山協会が合同で実施することで決定したのである。

これによって西ネパールから河口慧海の道をたどりプラン（タクラコット）からナムナニ、マファモツォ（マナサロワール）、カン・リンポチェ（カイラス）を巡礼しラサに至るルートに開放後外国人として最初に入域したいとの夢は破れたのであった。それにも増して、ネパールと中国の国境通過が可能にならなければこの計画は実現しない。1～2年前から盛んにカトマンズ方面からは、コダリ～ラサの国境通過が許可される噂が飛んでいたが、現状はなかなかむずかしいものであった。

そこで、一旦ネパール側ルートを棚上げし、ラサからヤル・ツァンポー沿いに聖地へ入域し、ナムナニ、カン・リンポチェを偵察し、更にラサへ戻りギャラ・ペリを偵察し、ネパールへ抜ける計画に切り換えたのであった。これには、ヤル・ツァンポーを源流から大屈曲部まで観察する目的も含まれていたのであった。

機は熟していなかった。ギャラ・ペリ偵察は複雑な許可状況下であり（詳細は別稿）、国境通過も寸前のところでダメであった。（可能になったのは翌1985年春）結局1984年に許可されたのは、ナムナニ峰偵察のためにラサからヤル・ツァンポー沿いに辿るルートと付随したカン・リンポチェ周遊であった。（詳細はヒマラヤ156号参照）

4. ナムナニの西

ナムナニの北側は、聖湖マファモツォに続く丘陵である。ナムナニの中腹から見ると右に聖湖、左にラカス湖、その間を緩やかな丘陵が続き、遙か彼方に聖山カン・リンポチェの美しい南面の姿を眺めることができる。その聖湖から続く丘陵の一番低い鞍部から続々とヤクと羊の群れが降りてきた。一つの群れの多くは、30～50頭のヤクと200頭の羊や山羊そして2～3頭のチベット犬の集団

である。

一団また一団と切れ目なく続くその模様は、まるで一幅の絵巻物を見るが如く、私を19世紀初頭まで引き戻してくれた。

群れは、ナムナニの南にあるチベット、ネパール、インドの国境の街である普蘭に向かう。ヤクは既に刈りとった羊の毛を缶詰のパイナップルのように丸くして両側につけている。山羊はコンパクトにまとめ袋に入った塩（約10kg）を背につけている。羊はまだ刈り取っていないもので、これは普蘭でそれぞれ大きなハサミで刈りとられる運命にある。チベット犬は番犬だ。

ナムナニの西面は、このような一団が続々と南下するルートとなっている。ナムナニは東の頂上から西に長大な尾根を派生しており、その尾根の裾野は広大な丘陵となっており、チベット高原に住む人とインド、ネパールの人々の交易ルートとなっているのだ。

ナムナニの西面は、また、聖地マファモツォ、カン・リンポチェを巡礼する信者達の行き交うところでもある。ネパール側から来る巡礼達は、山羊に木の枝を積んでくる。馬はジープを見て驚き駆け去って行く。インドのヒンディーは、年間総数198人に限りカン・リンポチェ巡礼を許可される。彼等は普蘭と巡礼のスタート地である大金（ダルチェン）まで専用バスで送迎される。大金には彼等のためのゲストハウスがある。ネパールやチベットの信者達は、思い思いのテントを張り巡礼を続けていた。悠久の大地が汚染されることもなく続けられた、この巡礼の歴史は何時から始まったのであろうか。

5. ナムナニの登路

ナムナニは雄大な山姿の山である。西に長大な稜を派生し、その南側の上部は壁となっている。北西側に大きな氷河が2本あり、北面は巨大な岩壁となっていて北東に急峻な尾根を派生している。

ナムナニは1905年イギリスのロングスタッフによって西稜が6,700mまで登られたが、その上の深いギャップを越えることができなかった。その後は深いベールに包まれたままであったが、1963年

に北海道大学隊が当時ネパールにあるといわれたナラカンカール峰と誤認し、国境を越えて南東面に到達した。

1985年には、京大・同大と中国登山協会の合同隊によって、北西面のザロンマロバ氷河と西尾根を撃ぐルートから初登頂された。

ザロンマロバ氷河の北に広大な氷河が走っており、私達はこの氷河に入り北面から直接頂上に至るルートを偵察した。しかし、西面からこの氷河に直接入ることはできなかった。氷河から流れだす川の下流が大きなゴルジュ帯を形成しているためである。このため一旦ナムナニの北西面を5,300mまで巻くようにして登った。驚くことにこの斜面には数十頭の野生のロバが生棲していた。

私達はこの氷河から頂上直下で北東稜に合流している、短くてこの氷河に顕著に切れ落ちている「北カンテ」を偵察した。純白の氷河が北東稜末端まで続き、右岸側にはナムナニの第二峰とも言うべき古納峰(6,912m)の頂上が手の届く所にある。アブローチの輸送の問題さえ解決できれば絶好の登頂ルートと言える。何よりも激しい風の通り道となる西面や長大な北西面の氷河ルートの殺伐さに比べてここには、山を登る者にとって心躍る岩と雪の雰囲気があった。

何時の日にか再び大志を持ってこの稜に挑む決意を抱いて山を下りたのである。

6. ヤル・ツァンポーの源流

マファモツォを後にヤル・ツァンポー源流に向かう。良く晴れた青空の下を東に向かう。サモ川が流れる小さな谷は緑一色でその中に古い轍ががすかに残されていた。ところどころカルカの跡を見るがほとんど無人地帯を行く。やがて左右が開けた高原となりチベット野ロバやチベット羊の群に会う。後を振り返ると遙か彼方に雄大なナムナニが浮かんでいた。その左には6,000m級の山が連なっている。やがて前方から4人連れの巡礼が近づいて来た。この辺は乳色をした岩と黒い岩が散在し、カルカやチョルテンがあった。

とあるせせらぎで遅い昼食をしていると、30頭ほどのヤクを連れた移牧民と会う。かなり広い扇状地に石がゴロゴロとありジープも進むのに苦労

した。この場所でもキツネを見た。そしてマファモツォを出発してから3時間ほどで大きな湖である公珠錯に出た。手前には小さな池塘があり小魚が元気に泳ぎ花が咲き乱れている。湖を過ぎるといよいよ待望の「マヨム・ラ」への登りとなる。その手前で南方の吞拉(4,951m)越しに支馬雍丹夫山(6,532m)と思える山を見た。あいにくこの頃より雨雲となり判然とはしない。

マヨム・ラは標高約5,050m。今は訪れる人もなく峠であることの証左であるタルチョーが淋しくたなびいていた。訪れる人が少ない証は他にもあった。この峠の前後には野ロバが群れていた。

峠を下るとかなりの悪路を経て、ヤル・ツァンポーの北の源流であるマヨム・ツァンポーに出た。

マヨム・ツァンポーの右岸側には、4家族が住んでいた。エーデルワイスの咲き乱れる緑の岸を辿ると、源流に向かうと右岸は4～5段の広い河岸段丘となっている。やがて東側から大きな支流が合流する。合流点は緩やかな扇状となり、ヤクなどの骨が散在していた。源流はなだらかな丘陵が続く北西方向のようだ。標高約4,840mであった。

マヨム・ツァンポーを下れば、そこはヤル・ツァンポーの本流であり、流れを見たかったが時間がなく断念した。いずれにしてもヤル・ツァンポーを源流から下降するためには、南側の源流をも偵察しなければならない。ナムナニに登った後で果たして吞拉を越えて南側の源流に入ることができのだろうか。北側の源流は、水量は十分にあるものの浅瀬が多くゴムボートでも難しいようにも感じた。

なお、現在中国では、ヤル・ツァンポー川の源流はマヨム・ラの南にある、チェマヤンツォン・チューであるとしており、その南にありかつてヘディンが源流としたクービィ・チューを否定している。

7. ヤル・ツァンポーの中流

チベット最大の河であるヤル・ツァンポーを渡るには、橋と動力による船、コワやイカダなど幾つかの方法がある。中流部に位置する曲水から上流部には、大竹と拉孜の二カ所に動力による船が

運行されている。

拉孜の渡しは、太い一本の鋼線が兩岸を撃いており、船は兩岸の動力によって引き上げられるようにして運行していた。多分この渡しは開放後外国人としては、私達が1984年7月に渡ったのが初めてであったと思われる。この付近は川幅が極端に狭く、曲水あたりの広さを見ている目には、増水期にはどうなるのだろうか？ と思った。しかし、7月～8月と言えば十分に増水期であり、これが満水の状態ならば十分に下降の可能性があると思えた。

大竹の渡しは、川幅も広く流れも速かった。ここは船台の横に通常の船が連結されて、兩岸交互に運行されている。8月中旬の満水期とあってか河は滔々と流れ、いかにも大河という雰囲気であった。

曲水からコンガ空港までのヤル・ツァンポーは多くの人々が見ている。中洲が幾つもあり相互に流れあう様は、一見優雅に見えるが、これを下ろうとする目には複雑に写る。大きな滝こそないものの合流点には必ず滝が現われ渦も巻いていた。この付近では曲水の大橋以外は地元のチベット人はコワを駆使して河を渡っている。中洲から中洲を継いでの渡河は、コワは軽くて重宝である。

コンガ空港に降り立つ前に飛行機は、ヤル・ツァンポーの上を飛ぶ。乃東や朗県あたりも一度は見えておかなければならない。特に加查から米林の間には、最近になって人口衛星から発見されたといわれる「滝」の存在も噂されており、これが真実ならば川下りにとっては、黄河の壺口瀑布や長江の虎跳峽に匹敵する困難な障害となるだろう。

8. 東のヤル・ツァンポー

大河ヤル・ツァンポーは、ナムナニの西から発して1,500km東流し、朗県から徐々に北東に進み、ナムチャ・バルワの東で南へ向きを変えて、アッサム平原に入り西へ流れ行く。その北東から南へ流れを変える付近を「大屈曲部」グレート・ベントと称する。

グレート・ベントの入口となる場所が米林である。林芝からニイヤン・チューに沿って小1時間も下るとヤル・ツァンポーに合流する。この付近

はリンゴの産地でもある。ヤル・ツァンポーは川幅も広くゆったりと流れている。上流側には、現在地元民でも通行許可証無しには、通れない立派な大橋がかかっている。米林の南に大きな谷が入っており、約150kmも下れば、アッサムである。この大橋の重要性はその造りからも察することができるのである。

米林は小さな街であるが、街並も建物も小ざっぱりとして気持ちの良い所である。林芝も石畳などを敷いた気分の良い所であった。それに比べると典型的な名を与えられた八一鎮は強風の通り道に造られた殺風景な街であった。

米林はヤル・ツァンポーの右岸側にある。これより下流にあるグレート・ベントの喉とも言える「ベ区」には、右岸通しに道が作られている。しかし、アッサムとの狭間にある山々から幾つもの水流が、ヤル・ツァンポーに流れ込み、道はいたる所で氾濫しており、トラックといえどもその渡渉は容易でない。減水期でこの有様では、7～8月の満水期は相当の水量となるだろう。

ベ区までのヤル・ツァンポーは、徐々に川幅を狭めて行くが、不思議なことに兩岸のところどころに白い砂が小山を造っている。南の開けた谷からの風のためであろうか。

以前、建国の意気に燃えていた頃は、ヤル・ツァンポー河左岸にも自動車道路が走り、ベ区からトラックなども積める動力の渡船があった。現在は行き交う人も地元民だけのためか、左岸の道と動力船は使われていない。痕跡が残るだけである。

ベ区は、大屈曲部への旅装を整える所である。招待所の屋根越しには、夕陽に映えるナムチャ・バルワの圧倒的にそそり立つピラミダルな三角錐の頂上と、人を寄せつけない絶望的な西壁が手の届くほど近くに見える。こんな素晴らしい景色が見える所も少ない。

ベは、これから奥のギャラや中心地米林への隊商が一休みする中継地でもある。この付近の馬は小柄のものが多く、ベの標高は約2,960mであり、この付近にはヤクはいない。馬が輸送手段の主なものである。しかし、それもギャラやチュベまでである。ベの人口は2,753人と話してくれた。

9. グレート・ベンドへ

ペからヤル・ツァンポー左岸へ、双胴の丸木舟で渡る。馬鹿でかいオールで漕手が3人河の中ほどから懸命に漕ぐ。水は容赦なく荷物や乗客に降りかかる。丸木舟の中にも水が溜り、全ての人と荷が水を浴するころ対岸に着く。この間約5～7分。ここですかさず漕手に煙草を差し出すのがコツのようだ。そうすれば、往復がスムーズになる。

左岸はティンベという。ティンは数字の3という意味でありネパール語と同じである。人口120人、小學校生徒26人（内女7人）先生2人。9月の中旬はまだ雨の日が多い。左岸沿いの高台につけられた幅の広い道を進む。少し登り気味にゆっくり歩いて1時間半でスースンに着く。ここから同じような道をカンブー（自生している小さな桃）がたわわに実るのを見ながら進むと、対岸にキイカルが見える。スースンから2時間で標高3,170mのターリンに着く。草原もなく畑の土を掘り起こしたばかりの所にキャンプ。

「チャバダンゲドウ（雨がきた）」雨季のキャラバンは、この言葉の連続である。ターリンから狭くなった山道を一気に下り2時間で、左岸の最奥の部落チュベに着く。部落といっても一軒の家があるだけである。ヤル・ツァンポーに迫りくる山稜が少しばかり切れて小さな草原となっている。その切れた所は、一の倉沢衝立岩の何倍もの岩壁となっており、その下から草原まで広葉樹や針葉樹が生い繁り、この一軒の農家の格好の狩猟場となっているようだ。

チュベから先は馬も使えなくなる。1時間ほどは、小さな草原と灌木帯が続く。この付近から左岸に迫ってくる尾根を幾つも回り込むようにして行く。河に降り立つ以外は、標高3,000m付近を歩くことになる。

チュベの草原を過ぎると踏み跡程度しかなくなり、平地はある程度痕跡を辿ることができるが、一旦山道に入るとほとんど下草や灌木が生い繁り道はわからなくなる。ティンベからギャラ・ペリ付近にクマ撃ちに行ったことがあるという猟師を1人案内人に雇ってきたが、やはりカンがあるとみえて考え考え迷いながらも道を開いて行く。彼

等は人間1人が通れる道しか作らない。後から続くポーターも背負っている荷物のことはあまり考えない。枝に引っかかるがぶつかろうが強引に突破しようとする。荷主の私達はなるべく猟師の後について荷物の幅ほどまで枝や下草を払いながら進む。ポーターはその間「休息」の連続である。

深い森の中で昔さながらの小屋掛けをするポーター達と、私達の夏用テントが木立を通す仄な光に浮かび上がる。まさしく探検時代を彷彿させる光景である。幸運にも落ちんとする光の中にギャラ・ペリの南西面がくっきりと浮かび上がった。ポーター達も久し振りの晴れ間と、神秘なまでのギャラ・ペリの雄姿に歓声を上げる。写真を撮ろうとするが、前方の大きな樹が邪魔である。ポーターは50cmほどの長さの山刀でこの樹を倒してくれた。

ヤル・ツァンポーの河岸まで降りるようになる頃には、対岸の緑の美しいギャラ村が見えてくる。1本の小さいが水量が多く急峻な川の前後に、マニ塚が積まれている。タルチョーがはためきマニ石も苔むして何か寂し気である。チュベ寄りの大きなマニ塚からヤル・ツァンポー河へ少し下ると、滝となっており、ごうごうと周りを圧倒しながら水が落ちている。ちょうどマニ塚とヤル・ツァンポー河との中間位の位置に、一部分だけ岬のように突き出た場所があり、ここがこの地方では神聖な場所とされるアシャン・チュ・ゼエの神像が安置されている所である。滝の右岸側に祭壇があったが滝身までは見えなかった。チベットのポーター達はここで祈りを繰り返した。

下流寄りのマニ塚は小さいが、ここから5分ほど登ると小さな無人の寺がある。かつては、ギャラ村を中心にベマウコチュンなど、この辺一帯が栄えていた頃は、大勢の信者が列をなしたに違いない。今は訪れる人もなく石段には野生の牛の糞だけが点々と続いていた。

ギャラ・ペリの対岸から、相変わらず尾根を回り込むように山道に行く。竹林も多くなる。そろそろ道も雑木の中に入り始め伐採しながら進み登りが続くと、ギャラ・ペリとセンダンブーから流れ出すギャラ・ペリ川がヤル・ツァンポーに注ぎ込む地点を見下ろす場所に出る。

この高台からヤル・ツァンポーの下流を見下ろすと、ギャラ・ペリ南稜や、ナムチャ・バルワ北西稜から派生する尾根を縫うように流れ落ちていた。

幻の虹の滝はどこにあるのだろうか。ロッパが住むという部落は、あの南稜の遙か彼方であろうか。大屈曲部最深部は、まだまだ遙かに遠い。

10. ギャラ村付近

ヤル・ツァンポー河大屈曲部へ至る右岸側の最奥の部落は、ギャラ村である。この村の住人については別稿を参照されたい。(ヒマラヤ196号)

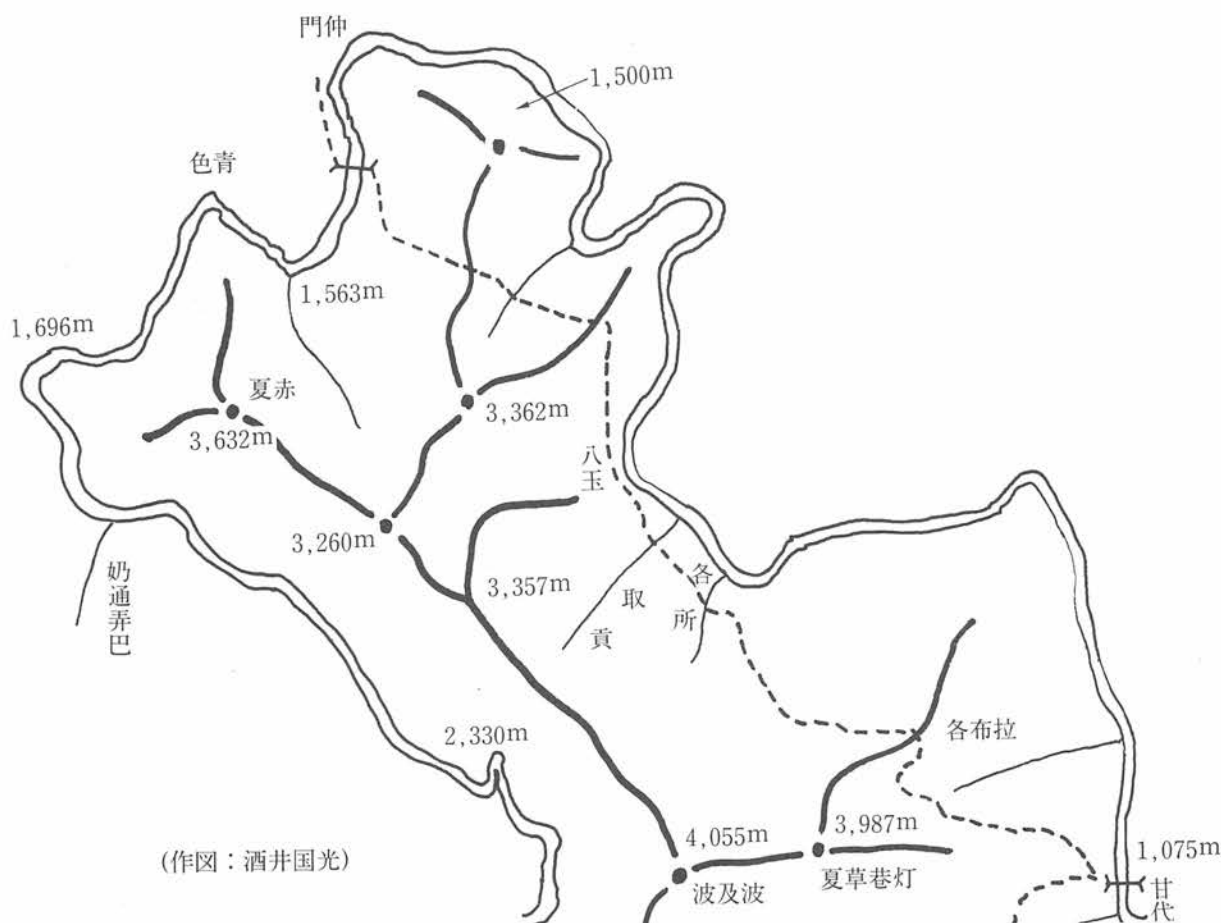
ギャラ村からギャラ・ペリの南西面が良く見える。双耳峰の山姿はこの村の人々の生活に何かに

つけかかわって来たのだろうか。久し振りの外国人(多分1947年のラッドロウら一行以来約40年振りに)に違いない。1日中私達の周りから離れず、老若男女を問わず近づいてくる。

ギャラ村の獵師は、センダンの広場や、ギャラ・ペリの西面、南面まで熊や野生の牛などを獲りに行く。その往復に使うのが太い木を削って三本を二等辺三角形に継ぎ、その上に竹や板を渡した簡単なイカダである。竹を渡した小さなイカダは漕手も含めて大人3人と荷物50kgほどが限度である。村の少し下流が渡し場になっており、べで見たと同じような双胴の丸木舟を造ろうとした残骸が捨てられていた。

ギャラ村は、川に面した場所が畑になっており、

グレート・バンド核心部



一段上った所が部落になっている。村の中心には脱穀場と保管場を兼ねた建物があり、周りにそれぞれの家が建っている。尾根は板葺きである。村の周辺には、この辺特有の大きな胡桃の木があり、村全体を守っているかの如き風情である。更に上部にも少し畑があり、村の東側に馬や羊を放牧している広場があった。

9月の末頃から紅葉が始まった。色とりどりの樹々がヤル・ツァンポーを染めている。その中にひととき白いギャラ・ペリの山姿が浮かび上がる。ギャラから上流は、白樺の木立が続き、ところどころアッサムとの境界の山々から流れ込む川を渡らなければならない。途中一カ所だけ、岩壁を削ってつけた道がある。ここは、馬の荷を降ろし人手によって運ばなければならない。狭い急な坂道を馬は上手に歩いて行く。

ギャラ村から上流に8時間ほど歩くと、ジュベの部落になる。ここまで人家は一つもない。途中から左手に圧倒的なナムチャ・バルワが見えはじめる。10月に入ったというのに高い山には、まだまだ雲がまとわりつく。更に1時間ほどでキカルに着く。キカルは部落は戸数も多い。ここから山を巻くように自動車道路が造られている。その一番高い所から見ると、左下にキカルは部落の尾根と田畑が、そして正面にはナムチャ・バルワの三角錐を眺むことができる。

山を降りるとキカルから3時間でニディンの村に着く。刈り入れが終わり脱穀に忙しい村人達も、先日私達が塩やチベット自治区成立20周年記念として、中央政府から一軒に1箇プレゼントされた「花茶」を運んできたことを覚えていて愛想が良い。

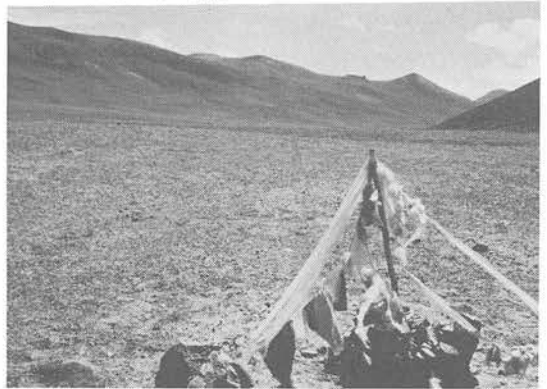
ニディンから2時間で、ヤル・ツァンポー河を見下ろす場所に伝説の人「ミラ・レバ」の手形を祭った場所に出る。チベットには、ミラレバ伝説が多い。カン・リンポチェ巡礼コースにもミラレバが足を当てたと伝えられる石が残っていた。

ここから30分ほどで、大きな工場があるチョトンに出る。チョトンから1時間でペに到着する。

11. おわりに

カイラス山（カン・リンポチェ） マナサロワー

▼ヤル・ツァンポー源流マヨム・ラ



ル湖（マファモツォ）グルラ・マンダータ峰（ナムナニ）などが聳えるチベット西部の高原から流れ出ているものと思われたヤル・ツァンポー河も、実際は南側の源流はネパールとの国境近くの支馬雍丹夫山（6,532m）付近を源流として、チェマーヤンツォン川となり桑木桑でクービー・チューと合流する。また、北の源流はマヨム・ツァンポーであり、マヨム・ラからも源流の一滴が流れ出す。マヨム・ラの一滴が流れだす湿原では、ジープがぬかるみに簇まり脱出するのに往生した。

源流ばかりでなく、途中でチャンタン高原、グレートヒマラヤからの支流を合わせて、ヤル・ツァンポーは東流する。コンガ空港近くでは相当に広い川幅であるが、べ近くからは川幅もぐっと狭まり、ブラマプトラと名を変えるアッサムに入るまでは、高峰の間を激流となって流れ落ちて行く。

ナムナニは初登頂され、ナムチャ・バルワは熾烈な情熱の末H.A.Jに最初の機会が与えられた。ヤル・ツァンポー河下りには、100万ドルという巨額なロイヤリティが取り沙汰されている。

10数年前の私の夢は、現実味を帯びて私の目の前にある。この残された最大のアドベンチャーとなるだろう計画には、巨額な費用を必要とし、それ故に本当の夢、幻となる恐れがある。

大屈曲部は今もひっそりと息づいている。計画を促進させるための膨大なエネルギーを上回る、未知への憧憬なくしてこの夢を遂行することはできないだろう。（1987.7.31記）

■参考文献

1. Kenneth Mason: Kishen Singh and the Indian Explorers, GJ. vol. 62: 12, 1923. [望月達夫訳「ヒマラヤ探検史の一駒」『山岳』第34年第1号、163～182頁]
2. Frederick Markham Bailey (1882—1967) : No Passport to Tibet, Rupert Davis, London. 1957. [松月久左・諏訪多栄蔵共訳『ヒマラヤの謎の河』あかね書房、1968年5月]
3. —: Exploration on the Tsanpo or Upper Brahmaputra, GJ. vol. 44: 4, 1914
4. Arthur Swinson: Beyond the Frontiers: The Biography of Colonel F. M. Bailey, Explorer and secret Agent, Hutchinson, London, 1971. [紹介・吉沢一郎『山と溪谷』1973年2—3月]
5. F. Kingdon-Ward: The Mystery Rivers of Tibet, Seeley Service & co, London, 1923.
6. —: Exploration in South Eastern Tibet, GJ. vol. 67: 2, 1926 [前出『ヒマラヤの謎の河』323—360頁に訳出]
7. 国岡宣之「イルマ・ベイリー夫人」『岳人』265号、1969年。
※以上1～7は「ヒマラヤの高峰3」
8. ナムチャ・バルワ (深田久弥)「ヒマラヤの高峰3」白水社 1973年8月 4,800円
9. 中央アジア探検史 (深田久弥) 白水社 1971年9月 2,000円
10. ヒマラヤ (メイスン: 田辺主計/望月達夫共訳) 白水社 1975年4月 4,000円
11. 国境のかなた—大探検家ベイリーの生涯—アーサー・スウィソン・松月久左訳 白水社 1975年12月 1,800円
12. Harold R. Fletcher: A Quest of Flowers
13. 中国で1973年—74年に出版されたヤル・ツァンポー江に関する資料一覧 (藤井毅)「インド・ヒマラヤのすべて」日本ヒマラヤ協会 1976年11月 2,400円
14. ヤル・ツァンポー河大湾曲部探査 (楊逸嘯、丘陵美訳)「ヒマラヤ94号」1979年9月号
15. ナムチャ・バルワ (水野勉)「ヒマラヤ128号」1982年7月号
16. ルンタの秘境 (江本嘉伸) 光文社 1984年4月 980円
17. ナムチャ・バルワ峰登頂を目指して (李舒平)「岳人451号」1985年1月号
18. 氷山雪嶺二千年—中国登山史話 (周正著・譚佐強・田川常雄共訳) ベースボール・マガジン社 1985年3月 2,200円
19. ナムチャ・バルワ (伊東亨)「山と溪谷597号」1985年11月号
20. 秘峰ギャラ・ペリ偵察1985「ヒマラヤ170号」1986年1月号
21. 7,000mの未踏峰をめざして (ギャラ・ペリ偵察)「岳人463号」1986年1月号
22. 東チベットの大湾曲部と幻の高峰 (山森欣一)「山と溪谷601号」1986年2月号
23. 最高峰ナムチャ・バルワとヤル・ツァンポー大湾曲点周辺の山々 (山森欣一)「岳人464号」1986年2月号
24. ギャラ・ペリとナムチャ・バルワ (伊東亨)「岳人464号」1986年2月号
25. 加拉白里登山計画「ヒマラヤ179号」1986年10月号
26. 第2次チベット・ヒマラヤ登山隊報告書 (大分県山岳連盟) 1986年12月
27. 謎の河の白い頂 (HAJ ギャラ・ペリ登山隊)「ヒマラヤ183号」1987年2月号
28. 謎の大河にそびえる幻の高峰「ギャラ・ペリ」(日本ヒマラヤ協会隊)「山と溪谷618号」1987年2月号
29. チベットの秘峰・南迦巴瓦峰 (王振華)「ヒマラヤ184号」1987年3月号
30. 謎の河の秘峰ギャラ・ペリ 日本ヒマラヤ協会 昭和62年9月1日
31. 東ヒマラヤ探検の歴史(上) 東チベットとビルマ北部の山々 (金子民雄)「岳人488号」1988年2月号
32. 東ヒマラヤ探検の歴史(中) ベイリー、ウォードらの探検 (金子民雄)「岳人489号」1988年3月号
33. チベットの山 (C.アレン著 宮持優訳) 未来社 1988年7月 1,800円

編集後記

HAJの未踏峰へのあくなきチャレンジの足跡は、会の歴史の中核を占めているといえよう。

7,000メートル峰だけでも以下のとおりである。

◎バツーラII	7,730m	パキスタン	'78
◎ランタン・リ	7,205m	ネパール	'81※
ジチュ・ダケ	7,012m	ブータン	'84
(南峰 Ca 7,000mに登頂)			
◎マモストーン・カンリ	7,526m	インド	'84※
サセール・カンリII	7,518m	インド	'85※
(西峰にインド側メンバーが初登頂)			
クラウン	7,295m	中国	'85
ガンケル・プンスム	7,541m	ブータン	'85
◎チョー・アウイ	7,534m	中国	'86
◎カルジャン	7,216m	中国	'86
◎ギャラ・ペリ	7,294m	中国	'86
◎ラプチェ・カン	7,367m	中国	'87※
◎リモI	7,385m	インド	'88※
クラウン	7,295m	中国	'90

実に魅力に溢れた12峰に13度挑み8峰に初登頂することができた。しかし、この道は茨の道の連続であった。

1985年秋、HAJでは「一国の最高峰を初登頂する」千載一遇のチャンスを得て、ブータンのガンケル・プンスムへ隊を派遣した。しかし、努力は実らず涙をのんだ。

翌年再度許可取得を行い雪辱戦を展開すべく準備を進めたが、困難なルートに相対峙する人材を結集できないでいた。ブータン政府の規定する登山隊は7人以上との壁にぶつかったのである。

一方、同じ年に魅惑の山ギャラ・ペリに派遣する隊についても今一人材不足の感があった。執行部は悩み続けた。いずれにせよ、この二つの隊を一つにまとめるしかない。そして「一国の最高峰の初登頂」をとるか、「世界最高の未踏峰ナムチャ・バルワ」をとるの選択に迫られる。

断は下された。ガンケル・プンスムを捨て、ギャラ・ペリをとったのである。その後、ブータン政府はガンケル・プンスムを再びクローズし、ギャラ・ペリは果敢なアタックの末にHAJの手に落ち、ナムチャ・バルワへの想いはガンケル・プン

スムへの想いをも込めていや増したのであった。

しかし、88年1月のCMAとの協議以来、中国側から何の連絡もないまま2年が過ぎた。90年の総会の後の常務理事会では、いずれにしてもこれまでの経緯を踏まえて、HAJとしてのナムチャ・バルワを実践することが決議された。

この機会にいままでのいきさつをまとめ、ヒマラヤ224号(1990年7月号)から226号の3回にわけて連載した。さらに、84年～86年にかけて行ったヤル・ツァンポー江とギャラ・ペリ峰偵察と本隊の記録をも合わせ、若干の資料を加えて小冊子としてまとめたのが本誌である。

84年中国ナムチャ・バルワ隊へ、上部岩壁のためだけの技術協力員として派遣を予定した山田昇。その登山隊員に四川省内の合宿で岩登り技術を指導した角田不二。86年11月、88年1月と二度もナムチャ・バルワだけのために北京に足を運んでいただいた新貝勲。

共にナムチャ・バルワへの夢を語りながら黄泉の人となった3氏の御冥福を祈り、巻末の地図を作製していただいた酒井国光氏にお礼を申し上げたい。

(記：山森欣一)

神秘のグレート・ベンド

ナムチャ・バルワ

発行日 1991年1月1日

発行所 日本ヒマラヤ協会 (HAJ)

(The Himalayan Association of Japan)

〒169 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506号 ☎03-3367-8521

FAX 03-3367-4509

振替 東京0～48954「日本ヒマラヤ協会」

編集人 山 森 欣 一







